
マリーダさんがISの世界に転生しました・・・。

所天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリィダさんがISの世界に転生しました・・・。

【Nコード】

N0549U

【作者名】

所天

【あらすじ】

宇宙世紀0096袖付きのパイロット、マリィダ・クルスはジンネマン達を守り撃墜される。みんなに意思を伝え思い残すことはなかったがそこに死んだ姉達が現れ自分を転生させると言う・・・。マリィダ第2の人生はどうなるのか？

初投稿です。不定期更新です。

マリーダ撃墜、そして……。 (前書き)

こんにちわ。 所天です。

ガンダムUCとISの原作を読んで書きたくになりました。

・・・というか一夏とバナージ繋がりなだけwww

文章にすらなっていないかも知れませんがよろしくお願いします。

今回はそこそこUCのネタばれになっていますOVAでしか見てない方はこの話はスキップしてください。まあ、今後も時折ですが

(苦笑)

ではござい！

マリーダ撃墜、そして……。

宇宙世紀0096

シヤアの反乱から3年、地球連邦軍と袖付きと名前を変えたネオ・ジオン残党軍の抗争は今だ続いていた。

宇宙世紀が始まって以来100年近く繁栄を続けてきたビスト財団のサイラム・ビストと現当主カーディアス・ビストは“宇宙世紀の本来あるべき姿”を取り戻す為に100年近く隠し続けてきた連邦の秘密“ラプラスの箱”を袖付きに引き渡す事を画策する。

しかし連邦軍は計画を事前に察知、特殊部隊エコーズをビスト財団の持つコロニー インドストリアル7に送り込みカーディアスを抹殺そして“箱”の奪取を計画した。

袖付きは“箱”をカーディアスから受け取るためにガランシエール隊をインドストリアル7に派遣。

現在連邦軍所属ロンド・ベルによる追跡が行われていた……。

3

「目標捕捉。『ゲタ』を捨てて三つに分かれた。《ジェガン》にしては脚の速いのがいる。特務仕様がいるかもしれない。」

クルーからの連絡、マリーダ・クルスはMS《モビルスーツ》のコクピットでキャプテンでありマスターでもあるジンネマンからの指示を待っていた。

「出会いは偶然じゃないってことだ。あと十分で暗礁宙域に入る。片づけて帰ってこい。」

ジンネマンから連絡が来る。

「了解、マスター。」

マスターはよせ、と習い性の応答は帰ってこない。

強化人間として作られた自分はだれかをマスターと呼び、従うのが常だ。

ジンネマンはそれを嫌うのだが今日はその余裕はないらしいジンネマンの緊張が読み取れた。

貨物船に偽装しているこのガランシエルがわざわざ特務仕様のMSに臨検をされるといふのだこちらの素性はばれていると考えていい。

どこから情報が漏れたのか知らないが、この先もミッションの難航が予測できた……。

「マリィダ・クルス、《クシャトリヤ》出る。」

その後もガランシエル隊はミッションの遂行を続けた。

ミネバ・ザビの密航、カーディアスとの交渉決裂、インドストリアル7でのガンダム出現、バナージ・リンクスとの出会い、その後マリィダにとって忌まわしい記憶となる事も少なくなかったがジンネマンやバナージ、ミネバ達のおかげでこの最終決戦まで生き残ってきた。

そして今マリーダは“光”を感じていた目の前の敵を倒すことよりもその“光”を守りたくてすでに半壊していたクシャトリアを駆りマリーダは別の戦場に向かっていた。

（お・と・．．．なら．．．．人柱だ。呪．．．．した、．．
セナ・家と．．．．を隠し．．．ビスト．．．．）

（本気．．か？）

敵、いやあのリディ少尉とバナージの声が聞こえる。

リディ少尉の絶望を感じる、いつたいなにがそこまで彼を駆り立てるのだろうか。

自分もリディ少尉に語りかけるが彼は反応しない。

その時ネル・アーガマからの艦砲射撃がくる、リディ少尉の機体には当たらないが元味方であった彼の否定の意思は急激に膨れ上がった。

（みんなでおれを否定するのか．．．）

叫びビーム・ライフルをネル・アーガマへ向ける。

あのブリッジを消し去らねばと、それだけを考えトリガーを引いた．．．。

（よせえーっ！）

バナージが絶叫する。

だが間に入ることはできない。

Eパックに縮退されたメガ粒子が全開放され一直線にネル・アーガマへのび　　唐突に間に入ったクシャトリアがその前に立ちふさがった。

直撃を受け瞬時に上半身を蒸散させ下半身がつかのまの虚空を漂う

と膨れ上がった爆発がクシャトリヤを痕跡残らず消し去っていった。

(・・・・・・・・・・・・・・・・みんなを守り、自分の意思も伝えた。思い残すことはない・・・・・・・・) マリィダは満足していた。最後までミネバやジンネマン、そしてバナージ達と一緒にいることは叶わなかったが強化人間として生まれたい自分にとってはありえなかった人生を歩むこともできた。これ以上は贅沢というものだろう。

「待って！」

【待ちな！】

（ね、姉様！？）

目の前に自分の先に造られ第一次ネオ・ジオン抗争で死んだ姉達
がいた。

「がんばったね、プルトウエルブ・・・いやマリーダ」

【お前は私たちの中で唯一自身の名前を得た。たとえ後から人にも
らった名前だとしてもな】

「だから、この世界でのプルトゥエルブの名前は終わらせてーから
マリーダ・クルスとして生きなさい」

(それは！)

【別にお前の人生を否定するわけじゃあないさ。最後の妹への姉か
らのプレゼントさ。】

「【がんばって】」

(姉さま……。ありがとございます。)

【あちらの世界では私たち程ひどくはないだろうが、それでも戦い
はある。気を付けるよ。】

(はい！)

マリーダは光に包まれ消えていった。

マリーダ撃墜、そして……。 (後書き)

いかがだったでしょうか。
またがんばります。

次回予告

ISの世界に転生したマリーダ、もちろん赤ちゃんスタートである。
彼女の両親は誰だ!?

「マ、マスター!?!」

「ん、なんだ? マスターはよせ。パパだ!」

「!?!」

自分にこれを書けるのか……?

マリーダ誕生。(前書き)

今回は短いです。

いやあ、文章書くのは難しいな。

マリータ誕生。

瞼に入る光を感じて私は目覚める。

目の前には微笑みを浮かべた女性が自分を見ていた。

「あなた、起きましたよ。」

嬉しそうに誰かを呼ぶ。この人は誰だろうか？

「おお、起きたか。」

どこかで聞いた声がある。すぐに髭を生やした男がこっちに来る。

彼は……！！？

「ばぶたあ!?(マスター!?)」
男はジンネマンだった。なぜ彼がここにいる!?

「ん?なんて言ってるんだこの子は?」

「ばぶたあ!(マスター!)」

「さあ?なんででしょう?生まれたばかりですからねえ。」

「それもそうだな・・・なんとなく“マスター”と聞こえたが気のせいだろう。」

(合ってます!マスター何故ここに!?)

彼らは守ったはずだ!まさかその後死んだのか?ならばここは死後の世界とでも言うのか!?

「なんとなく言ってるのかわからんが一つ言っておこう・・・俺がパパだ。」

「私がママよ。」

（はあ？）

何を言ってる………!!

目覚める前の姉達の言葉を思い出す。“あちらの世界”と。

つまりここは違う世界なのだ。西暦なのか宇宙世紀なのかもしれぬ新たな世界だ。

（と、いうことはマスターが私の本当の父だと？クローンではなく？）

マリィダは戸惑いを隠せない・・・赤子なのでそんなことは関係ないが。

「あなた、名前は考えたの？」

マリィダは聞いてないが話は進む。

「うん、どうしたものか。性は別にどっちでも構わんから……」

「あら？いいの？てっきりジンネマン家の娘にしていると思っただけですけど。」

「どっちでもいいだろう。女の子だからお前の性にしよう……で名前だが“マリィダ”はどうだ？」

「いいですね。じゃあこの子は“マリィダ・クルス”で決まりね。」

「ああ、マリィダこれからよろしくな。」

こうして前世で“プルトエルブ”として造られた少女は“マリィダ・

クルス”として祝福されながら生まれた。

マリーダ誕生。(後書き)

すいません、この人しか父親役いません。
WWW
母親に関してはオリキャラになります。

IS登場。世界の行く先はどこへ……。 (前書き)

連続投稿になりますね。

マリイダの出身国は大学の第2外国語から決めました。 (適當すぎ
やなあ)

IS登場。世界の行く先はどこへ……。

数年経った。

父であるスベロア・ジンネマンはこの世界でも軍人らしくスペインの空軍所属なんだそうだ。

前世と違ってパイロットだがそこそ優秀らしい。宇宙《そら》を駆けるという意味では彼らしいのだろうか？

母であるフィー・クルスは夫の帰る所を守るしつかりものだ。

私にも優しく、同時に厳しい人でもある。

しゃべれないうちは自分の中でパパとマスターのどちらかで認識するのか悩んだが、今ではもう慣れてしまった。

「パパ」と初めて読んだ時なんて泣き出しそうな顔……いや、泣いていた。どれだけ感激したのだ彼は（苦笑）

そんなこんなでマリータは特に酷くもない、幸せな人生を歩んでいた。

が、ここでマリータは新たな時代の幕開けを目撃する。

篠ノ之束のISだ。

正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して開発されたマルチフォーム・スーツ。

どういうネーミングなのかマリィダにはわからなかったがすごいものができたものだ。とマリィダは感心した。
ジオン公国のMSを見た連邦軍も戦果を見てこんなふう感じたのではないだろうか？

と、発表から一か月はマリィダも思っていた。

しかし、ISはマリィダの思わぬ方向へと世界を導く。

のちに言うところの「白騎士事件」だ。

日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューター全てがハッキングされ、2341発以上のミサイルが発射されるも、その約半数を正体不明のIS「白騎士」が迎撃した上、それを見て「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した。
圧倒的性能である世界は驚愕した。

ただか高性能の宇宙服程度にしか思っていなかった物が現行兵器全ての性能を上回っているのだ。

各国がこぞって情報を集めた。

しかしわかった事と言えば

- ・ ISにはコアが必要である。
 - ・ コアは篠ノ之束しか作成できない。
 - ・ 現在コアの数は467機で全部である。
 - ・ ISは女性にしか使えない。
- だけだった。

軍事利用すれば大規模の戦争を起こす可能性を秘めているにもかかわらずISの正体は不明なところが多すぎた。それでもISの有用性は変わらないため各国はコアを回収のち「アラスカ条約」を締結、ISの取引などを規制すると同時に、ISの技術を独占的に保有し

ていた日本への情報開示とその共有を定めた。

が、それでもまだ世界の変革は止まらなかった。

IS唯一の欠陥である“女性にしか使えない”と言うことが社会構造を丸ごと塗り替えたのだ。

男尊女卑から男女平等へと変わりつつあった社会は急激に女尊男卑となった。

社会的地位の下がった男は今までの地位から転落し、女性は一気に這い上がった。

もちろん、ジンネマンもその影響を受けた。

ISより軟弱なパイロット等必要なく空を自由に飛び回った男達は地面に落とされた。

.....
マリダ達、家族内では大きな変化はなかったが家の外では女尊男卑が蔓延っていた。

SIDE ジンネマン・フィー

「まったく、面倒な世の中になったもんだ。罰でも当たったか？」

「そんなわけではないでしょうあなた、心当たりでもあるの？」

「いや、まったくくない。」

「だったらいいじゃないですか。私たちは今までどつりやっていきましようよ。」

「そうだな、スマン。ちょっと、弱気になっていたようだな。」

「ふふっ。珍しいこともあるのね。」

「そう言うな。しかしマリータはこれからどうするんだろうなあ？」

「そうですね。女性がなんにでもなれる社会と言っても女性がなんでもできるわけじゃありませんからねえ。」

SIDE OUT ジンネマン・フィー

SIDE マリータ

(パパは空軍での地位を降ろされた。別にIS乗ってるわけでもない女性が偉そうなのはおかしくはないか？)

(私ができることはなんだ？将来、普通に就職してもパパがもとの地位に戻るとは思えない。いや、そうではない普通に男女平等にするだけでいい。ならば、私にできることと言えば……。)

SIDE OUT マリータ

「パパ、ママ。私はISに乗る！」

IS登場。世界の行く先はどこへ……。 (後書き)

いかがだったでしょうか？

今回はIS学園に行く予定です。

それよりもこれ続けて大丈夫ですかねえ？
だれかコメントくれるとうれしいです。
でわ。

その道に行く理由。(前書き)

なんか、マリーダさんのキャラが違う。

マリーダさんにする必要あったのかな？

まあこのあとの変わったマリーダさんと思ってくねるといい
です。

でわじじい。

その道に行く理由。

マリィダがISに乗ると言った時、両親は反対はしなかった。だが、理由は聞いてきた。

「マリィダ。お前、なんでISに乗りたいたんて言い出した？」

「そうよ。最初は興味を持ってたみたいだけど白騎士事件以降見向きもしなかったじゃない？」

そうIS発表当初はマリィダもこの世界でも宇宙《そら》に行けると期待した。

しかし、あの白騎士がそれを完膚なきまでに否定した。

「これは兵器だ」と。

その日を境にISへの興味を失いISとの関係のないところを勉強していた。

MSとIS名前こそ近いもののMSは初めから軍事目的、ISは未知なる宇宙への脚掛かり、両者は似ているようで違うものだと思っていた。

何故、幸せな今新たな戦いをしなければならぬのか？

が、それも言ってもらえなくなってきた。

こんな世界はおかしい。

変えねばならない。

この世界で一番偉いのは誰だ？

首相か？大統領か？大富豪か？

違う。ISと開発者の篠ノ之束だ。

今の世の中はこの2つを中心に動いている。

篠ノ之束は行方不明、ならばISだ。

世界を元に戻すのだ。

そう両親に言った。

「お前、アホか？」

ジンネマンが唐突に言った。

「ア、アホ！？」

さすがに面食らったそんな言い方をされるとは思っていなかった。

「それは篠ノ之束と何が違う？ ISを使って世界を変えるんだろ？」

た、たしかにその通りだ自分もなかなか馬鹿な考えをするようになったものだ……。

「だいたい、子供がそんな事考えなくていい。今はまだ自分の事を考えてればいいんだよ。」

「それは……。」

「何かやりたいものはないのか？ そんな理由なら IS はやめとけ。それとも IS じゃなきゃならん理由があるか？」

私はパパのようになりたかった、前世と違い宇宙ではないが空を飛んでいた時は楽しそうだった。ならば……。

「空……。」

「ん？」

「空を飛びたいかな。パパみたいにそれでいつかは宇宙に……。」

「……。」

「……。」

「ダメ？」

「あなた？」

「……いいんじゃないか？さっきのよくわからん革命家よりは
ずっといいぞ。」

「ありがとう。」

「頑張れよ。」

「うん。」

こうしてマリータはISに乗ることになった。

ISの適正検査はSだった彼女はすぐに頭角を表しスペイン代表候補生となった。

そして今、マリータはIS学園に来ていた。

その道に行く理由。(後書き)

なんかとりあえず思い浮かんだものを書きなぐってる感じです。
大丈夫かな？

そういえば昨日のユニークがさっそく471もありました。
ありがとうございます。

また頑張ります。

IS第一巻の少し前の話（前書き）

アタリメさん。kuroさん。コメントありがとうございました。

修正して〜。滅茶苦茶修正したいわ〜。やっぱりあん時書き直すべきだったんだよね〜。失っ敗失敗。なーにやってんだろな〜俺。そういう訳で今までの文章、端折り過ぎだからその内修正するわ。

わかりにくいかな？木原君です。作者は木原君が大好きです。

でわ、どうぞ。

IS第一巻の少し前の話

SIDEマリダ

今、マリダはIS学園の校門前に来ている。

IS学園。アラスカ条約締結時に建てられたISパイロット育成機関。代表候補生のマリダがこれから通う学校だ。

ISは女性にしか使えない。当然、IS学園も女子校である。．．．のはずだった今年までは。

男が入るのだ。この学園に教師や用務員ではなく生徒として。世界初の男でISを動かせる者が現れたのだ。

彼の名前は織斑一夏。おそらく名字から考えるとあのブリュンヒルデ織斑千冬の血縁の者だろう。あの家にはなにかあるのか？

しかし彼を見るとバナージを思い出す。なぜだろう？

マリダは入学前に色々調べたがニュースで報道されている以上の情報は見つからなかった。

当然と言えば当然である。自分の国の諜報が調べても何もわからなかったのだ。個人が少し調べたところでわかるはずもないだろう。自分で直接見て少しずつ知るしかないのだろう。

そう決断したマリダはIS学園入学式のある講堂へと入って行った。

SIDEOUTマリダ

SIDE千冬

今年は例年以上に厄介な事になりそうだ。

まったく今だけでも十分に厄介すぎる生徒会長がいるというのに一夏にイギリスとスペインの代表候補生だと？

しかもそいつら全員が同じクラスでその担任が私ときたまんだ。

私を過労死させる気か？

この学園は。

……まあいい副担任の山田先生に任せよう。授業をすることに
関しては彼女の方が私よりも巧く勧められるだろう……多分。
それよりも一夏だ。まさかアイツがここに来ることになるうとはな
いっただいどうなってるんだ東……次にあつた時に締め上げて聞
か。

よし、入学式もそろそろ終りだ自分のクラスへの自己紹介でも考
えんとするか……。

SIDE OUT 千冬

SIDE セシリア

さて、やってきましたわIS学園。

まさか男性の方がこの学園に入ってくるとは思いませんでしたが私
には関係ありませんわ。

スペインの代表候補生も来ているとのことでしたが、なんてお名前
だったかしら……まあいいですわ。

まずは手始めにクラス代表にでもなつてセシリア・オルコットとブ
ルー・ティアーズの名前を世界に轟かす土台と致しましょう。

SIDE OUT セシリア

SIDEマリーダ

・・・誰かに馬鹿にされた気がするのだが、まあ気のせいだろう。それにしてもまさか織斑一夏と同じクラスになるとは、自分の運もなかなか捨てたものではないな。
しかしイギリスの代表候補生セシリア・オルコットも同じクラスとはどういう事だ？

普通、他のクラスに代表候補生がいなければ振り分けをと思うのだが・・・わざとか？

だとしたら厄介な事になりそうだが気を付けるとしよう。

さあ入学式も終わった。

自分のクラスへ向かうとしよう。

たしか1年1組だったな・・・なんて自己紹介しよう？

SIDEOUTマリーダ

SIDE楯無

いや〜。終わった終わった。よくやく終わったわ入学式。

なんでこの学園の入学式って生徒会長の挨拶がほとんどなのかしら？

普通は校長とか理事長の仕事でしょ〜？

まあ、裏の事情も知ってるし実質の権力者はあの人だから奥さんの校長があまりでないのもわかるけどね〜。

ま、いつか。

それによりも・・・織斑一夏のことよ。

イギリスとスペインの代表候補生のごとはすぐにわかったけど織斑一夏に関しては更識の力を使っても詳しいことわかんないし、困ったな〜。

篠ノ乃束は何考えてんかしら？
まあ、しばらくは様子見だね。

虚々。お茶入れて。

SIDE OUT 楯無

SIDE 幕

一夏・・・私の事、覚えているかな・・・。

SIDE OUT 幕

IS 第一巻の少し前の話（後書き）

どうでしょう端折ってないよ？多分。

・・・箒？あの人、一夏のことしか考えてないでしょ？WWW

なんか違う挨拶。(前書き)

こんばんわ。

歪曲師さん、k i k i y u y uさん感想ありがとうございました。

書き始めて3日、現在のユニークアクセス2946。

ありがたいことです。

これからも頑張ります。

なんか違う挨拶。

SIDE一夏

はあ。なんでこんなことになってしまったんだ。

本来なら藍越学園に行くはずだったのに……。

なんで、あの試験会場の人俺をIS学園の試験会場に案内したんだ？
慌ててた俺も悪いけど俺、明らかに男だろ……。orz

「わ、……。む……。」

まあ一番馬鹿なのは置いてあったISに触れちゃまった俺なんだけど
さ……。

で、でもまさかIS起動できるなんて普通思わないだろ？

束さんいつたいなにやってんだよ！？

ISは女性にしか使えないはずだろ？

「お・む……ん？」

ああ、今さらこんなことで悩んでも仕方ないよな。

千冬姉と同じ世界に入ったと思ってるか！

「おり……ら……！」

そついえば千冬姉今何処にいるんだ？

前はドイツにいたらしいけど……。

それにしても女子だらけだな弾のあたりなら喜びそつだけどここま
で来たらもはや恐怖だよ……。い、いや別に俺にそつちの気はな
いんですよ！？って誰に言ってるんだよ……。

「織斑君！？織斑一夏君！？」

「はっ、はい！！！」

SIDE OUT 一夏

SIDE 真耶

こんにちは。

山田真耶です。

今年は織斑先生のクラスの副担任になりました……き、緊張しますね……。

で、でも頑張ります！

教師になったんですから！

で、では早速挨拶と出欠を取りましょう。あと自己紹介もしてもらいましょう。

昔から出欠確認してみたかったんですよ。なんか先生っぽいでしょう？

「こんにちは。山田真耶です。このクラスの副担任になりました。これからよろしく願いますね？」

「よろしく願います！」

げ、元気ですねえ。

でわ次に行きましょう。

「では、出欠を取ります。呼ばれた人は返事をして、その後自己紹介をしてください。」

みんな、元気に返事をしてくれます。いいですね!!先生。

あ、次は織村君です。

織村先生の弟さんですね・・・IS学園での試験に関しては思い出しくありません、うううう。

はっ! (< >) またやってしまった。早く進めましょう。

「では、次は織斑君。」

「.....」

あ、あれなんか間違いました?

「織斑君?」

「.....」

えゝもしかして聞こえてないんですか?.....泣きそうです。

「織斑君!」

「.....」

(泣)

「織斑君！？織斑一夏君！？」

「はっ、はい！！！！」

SIDE OUT 真耶

SIDE マリーダ

はははっ。

入学早々彼は何をやっているんだ。

大方、女子だらけとかなんでここにいるんだ！とか考えていたんだろっ。

私のような出来損ないの元ニュータイプにもわかるんだ、さっきから気付かれないようにずっと織斑一夏を見るポニーテールの女子もわかっているのだろう。知り合いかな？

それにしても少し彼の声を聞いたがバナージそっくりだな。

間違っってバナージと呼ばないように注意しよう。

SIDE OUT マリーダ

SIDE 幕

一夏の馬鹿者！女子に囲まれてデレデレしおって！

私には気付きもしないで！

まあ、それは仕方がないのかももう何年もあつてないからな……。いや、弱気になつては駄目だ次の休憩時間にも話しかけてみるとしよっ。

SIDE OUT 幕

SIDE 一夏

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

今教壇に立って一夏に謝っているのは副担任の山田真耶先生。

身長や見た目のせいで歳上には見えないし、今までの話し方を聞くともむしろ年下なんじゃないかとも思える。

それにしても、ここまで男性に低姿勢な女性も珍しいなあ。

女子高やIS学園の卒業生とかかな？

「いや、あの、そんなに謝らなくても…。って言うか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

相当嬉しかったのか、山田先生は一夏の手を握りながら詰めよる。

あ、やっとか。

そんな感じでみんなが俺を見ている。

「えー…えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

なっ、なんだその視線は!?

「え、終わり?」みたいな感じで見ないでくれ。

ん。どうしようなにか気の利いた事を言わないと・・・。

うん。無理

「以上です。」

がたっ!

何かのコントの様に崩れ落ちる女生徒が数人見られた。
どんだけ期待してた。かんべんしてくれ。

まあ、とりあえず自己紹介は終わった、これで・・・。

パンツ!!!

えっ！？なに！？

というか無茶苦茶痛い。

何が起こった！？

原因究明の為に後ろを見てみるとそこには…。

「げえっ、関羽！？」

SIDE OUT 一夏

SIDE 千冬

がたっ！

まったく、入学早々に騒がしい。

一夏がやらかしたようだな。

制裁を加えておこつ。

パンツ！！！！

ふんっ！ようやく私に気付いたか。しかし、まあ仕事場を見られるのは初めてだ、さぞ驚くだろ……。

「げえっ！関羽！？」

パンツ！！！！（…、皿、）

「誰が三國志の英雄か！」

まったくこの馬鹿者が。

もう少し他に言うことはないのか……。

まあいい次だ。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな。本当に申し訳ないことをしたな、私でも手に余るかもしれん……。舐められるのはマズイ、今の内から厳しく言うておこう。」

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな？」

SIDE OUT 千冬

SIDE マリーダ

「……なんだ、その暴力発言は。軍なら分かるがここは学校だろうか？ いや、しかしISは兵器だ。彼女の言い分は正し……。

「キャ　　！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

・・・成る程、そういうニーズに応えたのか。
しかしお姉様とは・・・教師というのも大変なのだな・・・。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスだけに馬鹿者を集中させているのか？」

まだサービスタイトなのかすごいな彼女は・・・。

「きゃあああああつ！ お姉さま！ もっと叱って！ 罵ののって！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡ののをして〜！」

しかし、私のクラスメイトが馬鹿なのは間違いないようだ。
他のクラスメイトの良識に期待しよう。

SIDE OUT マリーダ

SIDE 一夏

・・・慕われてるな千冬姉。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は。そしてお前はまだ自己紹介すらやってないのか？」

訂正、つつか追記。我が姉は慕われてるけど 家族には手厳しいようだ。

「いや、千冬姉、俺は」

パンツッ!

3度目。千冬姉、脳細胞が死んじゃうからやめてくださいお願いします。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「え……? 織斑くんって、あの千冬様の弟……?」

「それじゃあ、世界で男子が『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

「……山田先生が次に進めてください。いつまでたっても終わらん」

千冬姉は諦めたか……俺も聞かなかったことにしよう……あとが怖い。

SIDEOUTー夏

SIDEMARIDA

ほう、兄弟だったか。

というより、それくらい自分で調べればよかったのでは……。
……まあいい、そんなこともある。

「では、次マリーダ・クルスさん。」

ん？私？

ああ、自己紹介か。てっきりさっきのやり取りで流れたのかと思っ
た。

結局いい案が浮かなかったな・・・適当に済ませるとしよう。

「スペインから来たマリーダ・クルスだ。よろしく頼む。」

・・・これでは織斑一夏と同じではないか。
もう少しなにか言おう。

「・・・織斑一夏、私は君に興味がある、君に期待もしている。こ
れからよろしく頼む。」

・・・これでいい、彼が何故ISに乗れるかも興味深いし、男女平
等への第一歩となるかもしれんからな。

空を飛び、宇宙《そら》を駆けるのが夢というのは嘘ではないが、
これも譲れない物でもある。

SIDE OUTマリーダ

なんか違う挨拶。(後書き)

いかがだったでしょうか？
フラグたったのか？

乙女の乙女による乙女の為の尋問（前書き）

こんばんわ。

早速、続きをどうぞ！

「えええええええ、フライング!?」

「し、しまったー！ー！ー！。私も先にやるべきだったー！ー！ー！」

回りの女子が騒ぐ。

一夏も突然の出来事に固まっている。

「ええい、静かにしろ!!! さつさと次にいかんか!!!!!!」
「!!!!!!」
再び千冬の声が響き渡った。

SIDE 一夏

まったく授業の内容、わからなかったなあ……。
なぜそんなことを言ってるのか?

さつきまで自己紹介の後の1時間目の授業であるISの基礎理論の講習が終わったからだ。

なぜ入学式当日から授業をやっていたか?

IS学園はどこぞのお偉いさんの命令かなんかは知らないけど時間がある限りIS関連の教育をさせたいらしいからだ。

よって、学園の案内はなし。だけど大抵の場所は地図を見なきゃ行けないっばいようだ。だったらそれくらいはやってもいいんじゃないか。授業中に俺はそう思った。

「……現実逃避はよそう。クルスさん、そうマリダ・クルスさんだ。」

スペインから来た……それだけしか知らない。にも関わらずさっきの言葉、弾の奴によく「鈍い」やら「鈍感王」などよく言われる俺だがさすがに思うところがある……。

思い過ぎしなのかな？あの後別にこっちにくるわけでもないし……他の女子に囲まれて動けないだけか……。

だが教室内の異様な雰囲気のおかげか、色んな意味で緊張感が高まってくる。」

（どうしたらいいんだよ……）
絶望しかけていると……。

「……ちよつといいか？」

「……箒？」

救いの女神、もとい箒がいた。

SIDE OUT 一夏

SIDE 箒

篠ノ之箒は混乱していた。当然だ、知らぬ間に自分が慕う幼馴染が他の女に告白まがいの事をされたのだから。

自分の幼馴染はいつたいどうなっているんだ？あの人の話ぶりから見て、初対面だろう！？

何をどうやったらあの場面で告白されるんだと？と直接問いただしなかった。

が、自分だって幼馴染とは言え何年も会っていない。

自分だって、初対面だと思われているかもしれないのだ。

そう思うと怖くなってきた篤だが、「話しかけるだけなら」と一夏の席まで行き声を掛けた。

「……………ちよつといいか？」

（お願い、一夏。）

「……………篤？」

どうやら神は篤を見捨ててはいなかったようだ。

これなら少し違う場所で話しても別に不思議ではないだろう。

「廊下でいいか？」

一夏は了解してくれたようだ。

ならば、早く行こう。

「早くしろ。」

む、いかに焦ってはいかにぞ篤。

SIDEOUT 篤

SIDEMARIDA

むう、困った。

休み時間が終わってから何故かずっとクラスメイトが私の周囲を囲っている。

できれば、織斑一夏と話をしてみたかったんだが……。

だいたい、この子達はいったいなんなのだ？

さつきから

「いつからなの？」

だったり

「どうして？」

とか拳句の果てには

「とっちやいやだ」。ズルいよ。」

など私はどう答えればいいのか？

せめて主語を入れてくれ、主語を。

あ、織斑一夏が教室を出ていく。

あの子は確かさつきずっと一夏を見ていた子だな篠ノ之箒だったか？
しかたがない、折をみてまた話しかけるとしよう。

………待て、篠ノ之だと？

SIDE OUTマリーダ

SIDE 一夏

た、助かった。あの空気はヤバイ。

あのままだったらクルスさんの後に俺が彼女たちの餌食になってい

ただらう。

「……………とここで筭よ廊下まで人を呼び出して
無言とはどうなのだ？斬新すぎるぞ。」

「こっちから話しかけるべきかな。」

「じゃあ、まずは……………」

「そつえばさ、」

「なんだ？」

「去年剣道大会優勝したんだってなおめでとう。」

「……………」

「え、なんで赤くなって顔を背けるの？怒ってる？褒めたのに？」

「な、なんでそのことを知っている？」

「なんでって、新聞読んだから……………」

「なんで新聞なんか読んでるんだ!？」

「え!？新聞くらい好きに読ませてくれませんかねえ筭さん？」

「しかし相変わらず口調が男っぽいていうかサムライみたいだな。」

「あ、そうだ」

「な、なんだ!？」

「……………」

「あ、いや……」

ようやくく(?) 箒は自分の剣幕に気づいたらしく、ばつが悪そうにしている。まあいい続けよう。

「久しぶりだな。再開したとき一目見ただけですぐ箒だってわかったよ」

「え……?」

「髪型。6年前から変わってないだろ?」

僕は人差し指で箒の髪を指す。途端、箒は特徴的なポニーテールをいじり始めて、

「よ、よくも覚えてるものだな……」

「いや幼馴染のことを忘れるわけないだろう。」

「……………」

何故、睨む? 機嫌悪いのかな?

「そ、それよりもだ一夏!」

「な、なにさ?」

さっきより怒ってる俺そんなに悪いことしたっけ?

「あの、マリーダ・クルスという生徒と何があった!!!!!!!!!!!!!!」

そ、それか………。どうしよう、ほんとにあの人とは何も無いんだが箒はすごい剣幕だし……。

「あ、あのな箒。」

「なんだ！？早く言え！！」

「し、知らない。」

駄目だ教室の時と同じで何にも思いつかない。

「は？そんな訳ないだろう。」

「いやいや、マジなんだよ。俺も初めって会ったんだ。信じてくれ
！」

「……………」

この顔は信じてないな、どうしよう……………」

キーン、コーン、カーンコーン。

チャ、チャイムだ。助かった……………」

誤解は解けていないが仕方がない。教室に戻るとしよう。

「戻ろうぜ。」

「わ、わかってる！しかし……………」

箒をおいて先に歩き出す。

許せ、箒…………俺は何も悪くないんだ。

「さつさと席に着け織斑！！」

バシッ！！！！！！！！！！

「……………ご指導ありがとうございます。織斑先生。」
帰ってすぐに織斑先生のお出迎えがあった。脳細胞いくつ死んだかな……………。

乙女の乙女による乙女の為の尋問（後書き）

いかがだったでしょうか？

今までで一番マシに書けたかな？と思ったんですが。

さて、いよいよ次回はあの人が出てきますね？5話で出てきたあの
人ですよ？

ISの原作の中でいうところの序盤の序盤ですから脱線しすぎない
よう気を付けます。（手遅れかな？）

もっと感想いただけると嬉しいです。
でわまた。

男の意地（前書き）

こんにちわ。

アタリメさん、じん太さん感想ありがとうございます。

問題点のご指摘を受けて全編修正しました。と、言っても行間を短くしただけです。

文章には手をつけてません。

そして、なによりも問題だったのが“今までマリーダさん視点が殆ど無い”です！

書いてるうちにすっかり失念してました。

ごめんなさい。

そういうわけなんで今回はマリーダさん視点のみです。

地の文に関して未熟なので、なにかおかしいと思ったらコメントください。

男の意地

SIDEマリーダ

「であるからして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内を遺脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

現在2時間目。今は教卓で山田先生が丁寧に教科書に記されている文章を読んでいく。

織斑一夏と篠ノ之箒は教室に帰って織斑先生に出席簿による制裁を喰らっていた。今日何回目だ？

授業は進む。もちろん代表候補生である私と言うよりこの生徒である私は問題なく理解できる。暗証しろと言われればできるはずだ。おそらく他の生徒も同じだろう。

・・・織斑一夏の挙動がおかしい。チラチラと篠ノ之箒の方を見ている。自己紹介の時とは逆の構図だな。そんな一夏の不審さに気づいたのだろう。

「織斑君、何かわからないところはありませんか？」

「あ、えっと……」

「質問やわからないところがあったら聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

山田先生は見かけによらず、頼りになる先生のようにだ。

「……………先生。」

「はい！」

「ほとんど全部わかりません……………」

織斑一夏はどうやら頭がそんなによくないらしい。一部ならわかるのだがほぼ全てとなるとフォローする言葉を私は知らない。

山田先生も同じ気持ちだったのか……

「え……ぜ、全部、ですか……？」

山田先生の表情が自信に満ち溢れている笑顔から、完璧困っている表情に変わってしまった。

さすがにこの言葉は予想外だったのだろう。

「え、えっと……………織斑くんたち以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

困り顔な表情のまま山田先生はみんなに挙手を促す。

おそらくいないだろうが他の生徒にも確認するのはいいことだ、本当に運が無いな山田先生……。

「……………。」

誰も挙手しない様子。勿論、私もしない。これ以上彼女を悩ませたら死んでしまいそうだ。

と、ここで織斑先生が呆れ顔で聞いてくる。

「……………織斑、入学前に渡した参考書は読んだか？」

そう、そうなのだから読んで置けばいくらなんでも全部わからないと言う筈がないのだ。

まさか、届かなかったのだろうかありえる話だ。それならば仕方な
。。。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パン！

今回の制裁には同意する。

織斑一夏は頭が“悪い”らしい。

別にこれからの態度を変えるわけではないがもう少し自覚を持って
もらう必要があるみたいだな。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿」

「あとで再発行してやるから1週間以内に覚える。いいな？」

「い、いや、1週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

一夏諦めたように項垂れた。

「……はい。やります」

それが妥当だろう。これぐらい追い詰めないといざという時にまっ
たく使い物にならない。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。

そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故あつかが起こる。そう
しないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚える。そし
て守れ。規則ルールとはそういうものだ」

そうだな、それを私はあの“白騎士”に思い知らされた。あの騎士
はあの後何処に行ったのだろうか。

「貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな

？」

「……そんな顔をしているようだ織斑先生は身内の事をよく見ている。これに関しては今後の彼次第だ。私としては彼にはもつと頑張つて欲しい。バナージと比べるのも可笑しな話だが、今の彼には明確な目的が無いバナージには姫様という何にも変えられない人がいた。あれほどまでに大きなものを自分の芯とする必要はないが道しるべ程度のものは探しておくべきだろう。」

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」
「……織村先生は身内に人一倍厳しい方のような。」

「ちょっと、よろしくって？」

「へ？」

現在は2時間目の後の休み時間。

そろそろ織村一夏に話しかけようと思ったのだがまたもや先客がいた。ついてないな……。

話しかけているのは艶のあるブロンドとマリンプルーの虹彩の瞳が特徴の子だった。見事なロールがかかっている髪は貴族のようだ。あれが確かイギリスの代表候補生セシリア・オルコットだったな。

『いかにも』現代女子のような感じだ。ISの登場とそれによる女性優遇精度のおかげで『女性は偉い』的な構図が完成している。それによつて男性の立場は低くなり、悪くてただの労働力扱いや奴隷扱いされている。なので、街中ですれ違ったという理由で女子にパシられている男子を見かけるなんて当たり前前のようなことになつて

る。あの娘はその典型だな。

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……。」

「……こういうタイプは正直言って苦手だ。

代表候補生という事から自分に絶対的自信持ってしまい、英国淑女としての慎ましさというものを何処かへ置いてきてしまっているらしい……当然、私は最初からそんなものは持ってないが。

「悪いな、俺、きみが誰だか知らないしな。」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

これは織村一夏に同意する。たかだか代表”候補”生ごときで知って貰うのも可笑しな話だ。

「あ、ひとつ聞いていいか？」

「なんでしよう下下の要求に応えるのも貴族の勤め、なんでもおっしゃって。」

織斑一夏、ここまで瘦けにされてなお教えを請うか？ 判らない事を聞くのは大切だが時を選ぶべきだぞ。

「代表候補生って何？」

「がたがたっ！」

また周りの女子が転けている・・・ふふふ、ははははは。忘れていた織斑一夏は”頭が悪い”のだった。すっかり忘れていた。これにはセシリア・オルコットも絶句している。

「あ、あなた。」

「ん、なんだ？」

「本気で言ってますの!？」

「おう、でどうなんだ教えてくれ。」

「だ、代表候補生つてのは国家代表のIS操縦者の候補つて事だよ。つまりエリートつて事。」

さすがにマズイと思ったのか周りの女子が教える。字面で判らんか？

「そうか。ありがとな!」

織斑一夏がお礼を言う・・・無駄にいい笑顔だな。

「そ、そうエリートなのですわっ!」

セシリアが復活したようだ。案外精神力は強いのかも知れない。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

「そうか、それはラッキーだ」

「・・・バカにしていますの？」

まあバカにするほどでは無いにしろ。まともに相手をする必要はないな。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男子でISを操縦できる人と聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はズレですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが？」

む、その態度はいただけんな。

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間に優しくしてあげますわよ」

私とオルコットの間には優しさという単語に齟齬があるようだ。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一という単語のみが強調されて気もするが事実らしい。私の対戦相手は織斑先生だった。装備が完全ではなかったとはいえ、ブリュンヒルデの名に恥ぬ凄まじい強さだった。次は倒す。

「入試って、あれか？ ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

「は……?」

ほう、これは意外だった。対戦相手にもよるが、教師として長年ISを使っているベテランだ。それを初心者である彼が倒してしまうのは不可能なはずである。勉強はともかく実技の潜在能力は高いのかもしれない。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……?」

「いや、知らないけど」

「あなた！ あなたも教官を倒したって言うの!？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!？ たぶんってどういう意味かしら!？」

「えーと、落ち着けよ。な?」

「こ、これが落ち着いていられ!」
「一々、要領の得ない回答をする織斑一夏だったがセシリア・オルコットのプライドを刺激するには十分だったようだ。」

「わ、わたくしだけと聞きましたが……?」

「女子だけではってオチじゃないのか?」

キーン、コーン、カーンコーン。

話は終わったとばかりにスピーカーからチャイム音が鳴る。休み時間終了の合図だ。タイミングがいいのか悪いのかよくわからないが

これで静かになるな。次の時間こそ話しかけるぞ。

「っ……！　またあとで来ますわ！　逃げないことね！　よくって！？」

・・・やはり面倒なことになりそうなのは確かなようだ。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

現在3時間目の授業。この時間は1、2時間目と異なり、山田先生ではなく織斑先生が教壇に立って教えている。各種装備か……武器ならばそろそろ届くはずのあの装備についてもするのだろうか？

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

突然何かを思い出したらしい織斑先生が思い出したことの内容を話す。クラス代表か……クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席など、簡単に言えばクラス長のことだ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点で各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。1度決まると1年間変更はないからそのつもりで努力せぬばならない。

だがわかっているのは簡単な意味だけで難しいことは説明されていない。

織斑先生の台詞によって教室中が静かにざわめく。大方クラス長という面倒ごとを全部引き受けてくれる仕事を押し付けあつてるところだろうか。

引き受けてもいいがセシリア・オルコットもいるのだ彼女がやれば良いだろう。……いや、あえて織斑一夏がやった方がいいか？

別にクラス最強がクラス代表になる必要はないのだ彼の实力をつけるならばオルコットは相応しく無いだろう。

「はい。織斑くんを推薦します！」

「私も織斑くんを推薦します！」

クラスのみんなもそう思ってくれたのだろうか、もう私が推薦する必要はないな。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないならこいつで決めるぞ。」

「ちよつ、ちよつと待った！」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「そうだ織斑一夏みんなの好意だ受け取るべきだ。」

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

バン！！

デスクを叩きながらセシリア・オルコットが立ち上がった。やはり出てきたかセシリア・オルコット、空気を読んで黙っているかと思っただが土台無理な話だったらしい……。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえと仰るのですか！？」

何故わざわざそんな物言いをするのだ？ 敵を作るだけだぞ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東のサルにされては困ります！わたくしはこのような島国までES技術の修練に来ているのであって、サカスをする気は毛頭ございませんわ！」

「……このクラスは9割以上が日本人なのだ。」

さらに言うと織斑先生も日本人だ。彼女は命が惜しくないのだろうか？

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

……。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

ぶちり

ん？何か切れた音がしたぞ？いったい何が……？

「それを言うならイギリスだって国の自慢なんざ両手で数えるほどしかねエだろうが！他にあったとしても、世界一料理がまずい国のチャンピオンだろう！？」

「なっ……！！？」

織斑一夏は我慢の限界だったらしい。おお、かなりのプレッシャーを感じるぞ！？

一夏の台詞によって、セシリアは顔を真っ赤にして怒りの表情をし

ていた。それに、僕らを睨んでいる。……そうとうイギリスを侮辱したことに怒りを感じてるようだ。

「あっ、あっ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの!？」
一気に白熱した空気になる。

「決闘ですわ!」

「おう。いいぜ。4の5を言うよりわかりやすい」

ここまでくるとどっちもどっちだ。思う存分戦うといい。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらあなたはわたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

「もちろん。手加減したら男じゃねえ」

「そう？ 何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね!」

実にいい笑顔ださなのだろうか？

「ハンデはどれくらい必要かしら?」

「んなモンいらないよ。そっちこそいらないのか?」

瞬間、クラス内に笑いの渦が広がった。原因は間違いなく彼が今言った台詞だと思う。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「だからなにさ。お互いが本気でやらないと真剣勝負にならないっての」

それでも笑いは止まらない。相手は代表候補生で彼はISが使えるただの一般人。明らかに代表候補生の勝利で決闘は終わるだろう。だが……”それでも”戦うというのだ。これを私に笑うことは出来ない。さて、彼もやる気を見せたのだ、そろそろ私も話に入れて貰うとするか……。

「ねー織斑くん。今からでも遅くないよ？ セシリアに言って、ハインデをつけてもらったら？」

「少し……いいだろうか？」

SIDE OUT マリーダ

男の意地（後書き）

いかがだったでしょうか？

原作どおりには行かない決闘騒ぎ。

そろそろマリーダさんのISが出てきます。

もう一人の決闘の参加者（前書き）

さて、もう9話ですか・・・。

大変だ、大変だ。

先ほど確認しましたが総合ユニークアクセス数が4427でした。
ありがとうございます。

さて、ようやくマリーダさんの発言です。

ぜんぜん口に出してしゃべらねえと思ってたのでそこそこ喋らせま
す。

その為、前回よりさらに地の文が少ないです。すいません。

もう一人の決闘の参加者

「少し……いいだろうか？」

「????？」

一夏を含めクラス全体の緊張が緩む。

この謎のスペインから来たクラスメイトはこの状況で何をするといいのだ？

マリイダが続きを言おうとしたその時、いきなりほったらかしにされたお嬢様が爆弾を落とした。

S I D E マリイダ

さあ、織斑一夏の為に一つクラスメイトに言ってやるとしよう。

「おり……。」

「あら？自己紹介で訳の判らない事を言った、スペイン人がいったいなんのようですの!？」

「何を言っているのか判らんが、先の挨拶に関してふざけたことを言った覚えはないが？」

……クラスがおかしな空気になってしまった。織斑一夏の顔が少し赤くなっている。なんだ？

セシリア・オルコットも何やら怒っているが今は放っておこう。彼女には別の用件があるが、まずは織斑一夏だ。

「織斑一夏。」

「な、なんだ？
そう構えるな。」

「君の意思は好ましい。期待した通りの人物で嬉しい。」

「お、おう。
照れたのか？」

「クラスメイトのみんなに聞きたいのだから、挑発に乗ったとは言え彼の言ったことはおかしいか？いまこの時代で女性が強いのはあくまでISのおかげだぞ。素人とは言え織斑一夏はISを使える男子だ。同じ土俵に立っている。それでもこの戦いにハンデなどと妄言を抜かすか？」

「さあどうなる？」

「う、確かに」

「そういわれれば……。」

「そうかも。……ごめんね織斑くん。」

「え？あ、ああ勿論いいさ。別に気にしてないから、そんなに謝らないでくれよな!？」

「わかってもらえたようだ。これで……。」

「お、お待ちなさい。私はこのような人間と対等だなんて認めませんわ!」

「まだ、言うか。セシリア・オルコット。」

「ほう、ならば君はどういうつもりで決闘と言ったのだ？この男が無抵抗の人間だとも思ってた袋叩きにするつもりだったのか？」

「な、なにを無礼なそんなわけないでしょう！馬鹿にするのもいい加減にしていただけかしら！」

「だったら決闘相手である彼を認める。そこに君の男嫌いは関係ない。」

「わ、わかりましたわ……。」「これでいい。」

さっきまでの雰囲気の中で彼を置いておくといつの間にかマスコットにもなってしまう。

ISの強さ等は関係なく彼は対等だと全員に認識してもらわねばならない。

では、次に私の用件だ。

「それとセシリア・オルコット。」

「セシリアでいいですわ！なんですこと？」

「そうか、ではセシリア、君たちの決闘の後に私とも勝負してくれないか？」

「は？何を言ってますの？あなたも初心者のくせに私と戦おういいますの？」

「なにを言っている？私はこれでもスペインの代表候補生だ。言うてなかったか？」

「ああ。」

「いいですわ！」

今まで黙っていた一夏が話しを終わらせる。

「さて、織斑が言ったとおり話はまとまったな。それでは勝負は1週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。織斑とオルコット、それとクルスはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

ぱんっ！ と両手を打ちながら織斑先生がこの話を締めくくる。

よし、これで今やることは全て終わった。
練習でもしに行くとするか……。

SIDE OUT マリダ

もう一人の決闘の参加者（後書き）

いかがだったでしょうか？

ここから先の会話のイメージが曖昧なので少しペースが落ちるかもしれません。

また、感想ください。

試合準備（前書き）

こんにちは。

遅くなりました。すいません。

ここでお知らせです。いろいろと修正しました。

- ・ジンネマンの妻の名前をフィーに変更しました。
- ・第一話にあったクシャトリアをクシャトリヤに変更。
- ・山田先生の会話を少し変更。

いじょうです。

生産中ですさん、来栖さん、umbrella-taiiさん、田
楽マンさん、ASTRAY GFさんコメントありがとうございます
でした。

では、ごうぞ。

試合準備

放課後、授業が終わり皆帰っていったが織斑一夏は山田先生に呼び止められていた。大方、部屋のことだろう。しかし女子寮しかないが何処に住むのだろうか？

ちなみに私の部屋は1015だ。同室にはもうひとりのスペイン人がいる。失礼だがセシリアは彼女を代表候補生だと思ったのだろう。私だつてそう思う。

代表候補生をまとめてクラス配置するなど普通に戦闘時の戦力を換算した場合、明らかに差が出る。

一騎当千というわけではないが素人操縦者だけなら1クラスぐらい簡単に殲滅する自信がある。

負けるとしてもエネルギーの問題だ。それくらいの実力を手にしているからこそ代表候補生になれたのだ。あくまで、私見だが。

さて、織斑一夏と話したかったがもう先に行ってしまったようだ。仕方が無い部屋に帰ろう。

最近よくまわりに気づかず物思いにふけることが多い。戦闘中ではないからいいが、気をつけるとしよう。

コンコンコンッ

「はい、どうぞー」

少しのんびりした声が返ってくる。

「ただいま」

「おかえりなさい」

まだ打ち解けたわけではないが彼女が私のルームメイトだ。折角同じ部屋なのだから仲良くしたものだ……。

だがまあそれは後だ今はセシリアか織斑一夏との勝負の準備しな

くては。例の装備はまだだろうか？あれがなくては自分のISは未完成なのだが……。

「あ、そうそう織斑先生が職員室に來いって呼んでましたよー」
もしかして織斑先生経由で装備が来たか？秘密にするわけでもないが直接渡してくれてもいいだろうに……。

しかたがない帰ってきたばかりだが職員室へ向かうとしよう。

「そうか。では行ってくる」

そう言ってドアノブに手をかけた時……。

ズドンッ！

やたらと大きな音が聞こえた。

手で壁を殴ったような音だが、それにしても大きすぎる。まさかISだとも言うのか？しかし、部分展開をできるような生徒はいないはずだが……。

「わっ！何!?!」

「近くの部屋からだな……。ついでに見てくる」

「いつてらっしゃーい」

廊下に出ると織斑一夏が部屋から追い出されていた。

「どうした？ 織斑一夏？」

「ん！？クルスさんか」

「マリーダでいい」

「そうか？ なら俺も一夏でいいよ」

「わかった。で、どうした？」

「あ、ああ等と同じ部屋なんだが追い出されてしまったんだ」

よく相部屋にして文句が出なかったものだ……。

「ほう、女子と相部屋かなかなかやるじゃないか？」

「あ！ い、いや別にマリーダが嫌だっけわけじゃないんだ千冬姉が決めたことだな……。」

なにやら急に焦りだした。どうしたのだ？

「よくわからんがとにかく一夏は早々に今日の寢床を失ったのだな？」

「あゝ。まあそうかも」

さすがに可哀想と言うものか、だったら

「だったら私の部屋にでもいる。もう一人いるがマリーダがいいと言ったと言えば入れてくれるだろう」

その間にでも織斑先生に話をつけて新しく部屋を用意して貰うしかないな。

「は、はあつ！？ そんなことできるわけないだろう？ 女子と同じ部屋で…ね、寝る…なんて」

「ん？ なんて言った？」

もう少しはつきり話してくれ。

「な、なんでもないさ。でも女子の部屋か…」
「やたらと緊張しているしかしそれを言うなら…」

「篠ノ之箒だって女子だろう？」

「い、いや箒は幼馴染だし、あんまり女子って意識してなかったから…」

ガチャッ！

唐突に部屋が開く。

篠ノ之箒が出てきた。こっちの話を聞いていたのだろうか。

「入れ。」

怒気を孕んだ声に聞こえるが気のせいだろう。

「な、なんだ。許してくれるのか？」

「ま、まあいいだろう。別件で話すことが出来た」

「許すわりに殺気がすごいんですけど…」

「一夏」

「は、はいっ！」

「さつさと入れ」

「わ、わかった」

何故か一夏の入っていく姿が牢屋に入れられる囚人に見えた…。

「いいのか？」

「ああ、迷惑をかけたな」

「いや、別に問題はない」

「そうか、ではな」

「ああ、また明日」

だいぶ時間が経ってしまった早く織斑先生の下に向かうとしよう。

目の前に正座した一夏がいる。

「箒、なんでまた怒ってんの！？許してくれたんじゃないか…」

「黙れ」

「ハイ」

これから一夏といろいろと話をしないといけない。

だが、それにしてもマリーダ・クルスは何を考えているのだ。

まさか本気で一夏のことを……や、やめだやめ。今は一夏の折檻をするとうしよう。

夜は長いのだから…。

一夏達が別の意味で熱い夜を過ごしている間にマリーダは職員室に来ていた。

やはり例の装備が届いたようだ。別になくてもいけない事はないが相手は代表候補生、もしくはそれに勝てる程の潜在能力をもった

男だ用心しすぎることはない。さっそく、明日から練習を始めるとしよう。

礼を言つて帰ろうとしたマリィダだったが……。

「待て」

織斑先生に呼び止められた。まだ何か用があったのだろうか？

「なんでしよう？」

「ん、一夏についてだがクルス、お前どう思ってるんだ？」

要領を得ない質問がきた。

「どう、といわれましても。紹介の時に言った言葉が全てですが……？」

なにやらじれつたい顔をしている。そんな顔もするのだな……。

「ならば聞き方を変える。あの言葉はどういう意味だ！？」

まだ、よくわからないがおそらくはこういう答えが欲しいのだから。

「男性にもかかわらずISを使える一夏に興味を持ち、これからの社会を変えていくかもしれない彼に期待してるという意味です。これでいいでしょうか？」

この言葉がそんなにおかしなことだろうか？

「……はあ、そういうことか。わかった。すまなかつたなクルス。なにやら疲れたようなほつとした様な顔をした織斑先生であった。」

クルスの背を見送りながら、千冬は思う。

“一夏よりも酷いやつが来た”と、あいつは代表候補生だ。入学試験でも私程ではないにしろ驚異的な強さだった。だからISについてはいいいい。

だが、あの紛らわしい言い回しは酷い、酷すぎる。おそらく一夏を含めクラス全員がマリィダが一夏に好意を持っていると誤解しただろう。他の女子も好意は持っているだろうが、それは物珍しさか

らきている物がほとんどだ、今の所本気なのは箒ぐらいだろう。

これで一夏がどう動くのかはわからないが厄介なことに成っているのは間違いないと確信し苦虫を潰した様な顔をする千冬であった。

翌日からマリータは練習を始めた。

代表候補生と戦う勇気のある生徒はいなかったため一人でやるしかなかったが……。

それでも自身のISの感覚を再確認し装備の調整具合を確認するなど出来ることは少ないが着実に試合への準備を行っていた……。

そして決闘前日

「まあこんなものだろう」

マリータは満足していた。装備に関しては自分の要望通り、完璧と言っていいだろう。

IS自体も問題なく動く。あとは自分の腕しだいだ……。

セシリアの練習を見かけることはなかった。自分と同じで一人で隠れてやっているのだろうか？

そして彼女の対戦相手である一夏だが……。剣道場で見かけた。

篠ノ之箒に連れられて剣道の試合をしていた。

彼のISが何になるのかは知らないが剣道はあまり関係ないのではないだろうか？

確かにISの接近戦では剣やナイフ、手甲などさまざまあるが、まさか接近戦専用の機体ということはないだろう。いや接近戦専用だとしても接近戦以外何もできないはずはないだろう。

一夏は各国の企業にとってもいい広告塔になるはずだ。何処の企業が用意するのは知らないがそんな意地悪をするはずがない射撃

用の武器もあるはずだ。

となると剣道だけをやっていくわけには行かないはずだ。篠ノ之
篤は一夏を手伝っているようだがどうにも本人のISの認識が甘い、
大丈夫なのだろうか？

マリーダの懸念をよそに試合までの時間が迫ってくる。

今のマリーダには予想もできないことだが、この剣道のみをやる
というのはまだISを持っていない一夏にとってこの上ない練習で
あった。……本人達も気付いてはいなかったが。

試合準備（後書き）

いかがだったでしょうか？

やっぱりまた端折ってるような気がします。

どうしたらいいかなぁ。

一夏VSセシリア（前書き）

こんにちは。また遅くなりました。

クルスさん、umbrella-tailさん、イクリプスさん、Yuusさん感想ありがとうございます。

ようやくここまで来ました。ペース遅せえ。苦笑

今回は多分歴代最高の文字数……だったはずですが。

セシリア戦に時間掛けすぎた気もしますが、気にしないことにします。笑

あ、あとマリダのルームメイトの名前をつけたらどうかと感想があったのでつけました。いきなり自己主張がすごいことになってます。

では、どござ。

一夏VSセシリア

決戦当日

「ねえねえ、ほんとにここに居ていいのー？」

ルームメイトであるリナ・ビオラが尋ねる。

「ああ、問題無いだろう」

マリーダはアリーナの観客席にいた。

別にピットで待機していても良かったのだが、各々作戦等があるだろうし、試合が終わったとしてもマリーダとの対戦をすぐに始められるわけでもない。

ならばと、リナ達一般生徒と一緒にこの試合を見届けることにした。

ちなみにリナとは先日織斑先生に呼ばれたあの日の後に親しくなった。

同国人と言う事もあったが、それ以上に彼女の回りは穏やかで居心地が良かった。

よく覚えてないが1組にも似た様な雰囲気の人がいた気がする……。馬が合いそうだな。

「それにしても血の気が多いねえー。一組の人達は」

突然酷い物言いだが、血の気が多いか……言いて妙かもしれない。

「まあ確かにそうだな。言い争いから決闘など、中世のようだな」

「……その中世の決闘の後に試合を申し込んだルームメイトがいるって聞いたんだけどなあー？」

「む。それはまた別に理由があつてだな……」

何かうまい言い訳がないかと考えたが駄目だった。実際、セシリアが一夏と戦ってみたかったのが理由なので仕方が無かった。

「むー。言い訳しない。体を大事にしないとイケないよー？」

「わかった」

リナは心配してくれたようだ。彼女だってISに乗るのだから人の事は言えないと思うのだが、そんな野暮なことを言う気にはならなかった。

その後もリナと話していたが回りの観客から声があがる。

セシリアのISがピットから出てきたようだ。

勿論この機体については調べてある彼女が纏うISは第三世代型ISブルーティアーズ。巨大な特殊レーザーライフルスターライトmkIEE、そして私の装備と運用方法は少し違うようだ。オーレンジ攻撃可能なビット、ブルー・ティアーズあとは近接用の装備がいくつもある。後から装備を足していくつもりらしく試作機という意味合いが濃い代表候補生が扱うのだ特に問題はないだろう。

この試合では彼女の實力を先に見てしまう為、自室に待機してよつかとセシリアに聞いたが、

「なにをおっしゃるの!? 私があの男に全力で戦わなければ勝てないとお思い!？」

と怒られてしまったので言葉に甘えて観戦している次第だ。

セシリアはアリーナの中心に浮かんでいる。

よほど自信があるのだろう上から目線で一夏のピットを見ている。

……上から過ぎて上下がひっくり返りそうだ。

代表候補生だから理解出来ない訳でもないがそこまで対戦相手を見下すこともないだろうに……彼女が負けたときプライドはどれ程傷つくのだろうか？

「あ、マリーダ」

試合とはあまり関係ないことを考えていると再びリナが話しかけ

てくる。

「どうした？」

「織斑君出てきたよ」

確かにピットから一夏が出てきたが……どうにもISの様子がおかしい。

操縦もそうと言えばそうなのだが、なんとはいいいか……足りないのだ。

何か力を秘めているのを感じるのだが、まだ完成していない。

本当にバナージよく似ている。力こそ違えど彼の機体も“可能性”を秘めていた。

バナージとは違うと解っているがどこか比べてしまうのは何故なのだろうか。

またもや思考の海に沈むマリダだったがようやく準備の整った決闘者2人は最後の言葉を交わしていた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「当たり前だここまでできて来て逃げやしないよ」

「立派なこと……ではあえて最後のチャンスを差し上げますわ」

「最後のチャンス……？」

「ええ、クルスさんに言われて何を張り切ったか知りませんが私とあなたでは、やはり実力差があり過ぎますわ。無様な姿を晒したくなかったら今ここで謝りなさいな。まだ許して差し上げてよ？」

「断る。それはチャンスとは言わない」

「そう、残念ですわそれなら」

「お別れですわね！」

試合開始

耳をつんざくような音を立ててセシリアのブルーティアーズから突如、閃光が走る。

スターライトmk?のレーザーだ。

開始直後に正確な射撃を受け一夏のIS百式の左肩が吹き飛び、遅れてやってきた衝撃波が再び一夏を襲う。

「うおっ」

一夏のシールドエネルギーが10%程減少する。

決闘の始まりにしては不意打ちぎみな射撃である気もするが当然、戦術としては有効である。

ISの戦いにおける勝敗は単純でこのエネルギーをゼロにすることによって決する。

が、それだけではただのゲームの世界になってしまう。当然、危険はある。先のセシリアによる貫通攻撃がそれだ。

ISには絶対防御というものがあり、文字通りあらゆる攻撃を受け止めるが膨大なエネルギーを消費する。しかしこの絶対防御はISが自動的に発動させるものであり使用者の自主的判断で出すことはできない。

つまりISが絶対防御を発動させる必要性を認めなかった場合、貫通攻撃による衝撃はゼロにされずに使用者へと向かってくるのだ。今回一夏の受けた攻撃はレーザーによる貫通であったが肩に当たったため生命の危険はISに認められず「吹き飛ばされても平気」と判断されたので絶対防御は発動せず搭乗者である一夏を衝撃が襲ったのだ。

と、この試合までの一週間必死で勉強した教科書に載っていた情報を思い出し自分の身に起きたことを理解する一夏であった。

(ヤバいやばい。これエネルギー切れで攻撃受けたらマジで死ぬって！)

「さあ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」

こちらの焦りを知ってか知らずかセシリアはノリノリで攻撃を仕掛けてくる。

結局、筈にISの事を詳しく教えてもらえず一週間剣道ばかりしていた一夏だが覚悟を決める。

「装備、装備は!？」

白式に問うと使用できる武器が出てくる。

「近接ブレード…まあ刀だな。他には!？」

再度、問うが白式から何か出る様子はない。剣しかないようだ。

「なんだよそれ…。まあどうせ一週間剣道しかやってないんだ。贅言わずにやるか！」

中間射撃型のセシリアには無謀としか言えない状況だが、一夏はブレードを構え戦場へと飛び込んだ。

「うわー。織斑君大丈夫なのかなあー？」

「ん？」

リナの言葉で思考の底から帰ってきたマリーダが試合状況を見る。一夏は劣勢のようだ。何故だか知らないがブレード一本で戦っている。

手を抜いているようには見えない。まさか本当に近接戦しかできないISが送られてきたのか!？

「誰だあんなふざけたISを送ったのは。」

怒りを通り越し呆れたマリーダが一週間一夏のやってきたことを思い出し考えを改める。

(どうせ剣道しかやってなかったはずだ。下手に射撃をするよりマ

シカ)

よく見ると機動性はかなり高いようだ。あれで全力ではないとしたらクシャトリアを上回る速さだろう。

「織斑君、勝てそう?」

リナが心配そうに聞いてくる。

「いや、このままなら確実に負ける。……ところでリナは一夏を応援しているのか?」

違うクラスとは言えやはりE.S.を使える男に興味があったのか?

「んー。まあどちらかと言うとねー。不利な方を応援したくなるでしょう?」

……ただの判官贔屓だったようだ。リナにはまだ特定の男に対して興味を持っていないようだ。

「…そういうものか?」

「そういうものだよー」

そういうものらしい。しかし、リナには何も解説してやれてないな。セシリアは宣言通り本気で戦うつもりらしくスターライトmk?による狙撃ばかりでブルーティアーズを使う様子がない。

試合としては盛り上がりにかけるがさすがは代表候補生、確実に一夏にダメージを与えている。ギリギリで回避をしているが一夏が落とされるのは時間の問題のようだ。

「そろそろファイナーレのようですね
セシリアが誇る。」

一夏のエネルギーはもうほとんど無くなっていた。レーザーの攻撃で自身にもかなりダメージが入っており気を失いそうだ。

(あ、あとどれだけ持つ? だいたいセシリアは本気なのか? ライフルだけが装備とは思えないぞ)

全力を見せずとも一夏を超えるセシリアには脱帽する思いだ。代

表候補生は伊達ではない。

（まあ、いいか。どうせ入りたくて入った学園じゃない。負けたって誰かが責めるわけじゃないさ……） 戦意を喪失していく一夏。投げやりになってきたため攻撃が当たり始める。

（クツ！痛てえなあ。あんなに強い奴になんで喧嘩売っちゃったんだよ。）

今更ながらに後悔する。

（ああ情けないな、そろそろエネルギーも切れる。何がしたかったんだろうな俺は

……何がしたかった？）

突如、一夏の思考が急速に廻る。

（待て待て。織斑一夏。ISなんて訳の判らない物を手に入れて何を思った！？厄介だと思った？確かにそれもあるが本当にそれだけか！？）

（違う！！嬉しかった。昔から千冬姉に守られて、幕に心配されてきた俺が力を手に入れた！自分の手でみんなを守る力を手に入れたんだ！）

織斑一夏は自分の望みを思い出す。

（それに今は自分に期待してくれる人がいる！自分よりも強いはずなのに、こんな俺に期待してくれる！）
だったら一夏にやることは一つしかない。

（だったらその期待に応える！それが俺の義務だ！こんな所で負けるわけにはいかない！！！）

一夏の想いを受け止めたかのように唐突に白式が眩い光を放つ。

アリーナ全体に染み渡る様に広がった光が消えた時、白式は今までとは全く違う力強さを放っていた。

「な、なんだ？」

覚悟を決めたとはいえ突然の変化に驚く一夏。何が起きたのか判らなかったがその疑問の答えはセシリアが教えてくれた。

「あ、あなた初期設定で戦ってましたの!？」

勉強が足りなかったのか、正確には判らないが、どうやらようやく全力で戦えるようだ。これで白式が完全に自分の物になり思うがままに操れると判る。

そうと判れば一夏のやることは一つしかない。

「絶対倒す」

「!!!!!!」

先程とは全く違う雰囲気の一夏に驚くセシリアだが、彼女もまた凄まじい怒りの様相を挺していた。

「……それはこちらの台詞ですわ。初心者が初期設定も終わっていないISで代表候補生と戦うだなんてこのセシリア・オルコットを虚仮にするのもいい加減になさい!!!!!!」

遂にセシリアは自分の装備のブルーティアーズを展開し始める。

さっきまでは使う必要を感じなかったが今は違う自身の持てる力全てで織斑一夏を倒す。

「行くぞ。とりあえずは千冬姉の名誉を守る。……そしてマリーダの期待に応えるさ。」

「訳の判らない事を……鎮魂歌の始まりですわ!!」

「ね、ねえ？何あの青いの？」

先程まで出てこなかった背中の武装が突然展開される。

「ブルーティアーズ（BT）だ」

「いや、そうじゃなくてー。あの小さい板みたいなやつの事だよー」

リナが苦笑いしながら言い直す。

「あれもブルーティアーズ（BT）だ。本来ブルーティアーズはあの小さい板、ビットの事を指す。あのISはその試験機が一番機だからブルーティアーズ、そのままに呼ばれている」

確かに紛らわしいとは思っただがな。

「へー。」

あれを展開したということはセシリアは本気で戦うつもりなのだろうか？

「それにしても初期設定でセシリアと戦うのは無謀だったな。本気で戦わないとは言え代表候補生相手にそれはない」

「織斑君、気付いてなかったみたいだけどねー」

一夏の様子を見る限りどうやらその通りらしい。

アリーナの中で何を言ってるのかは聞こえないが、セシリアが出さないと言っただあの装備を展開する程だ。かなり頭に来ているのだろう。

遂にBTが動き出す。死角からのレーザー攻撃、そうそう簡単に避けきれぬものではない。

初期設定が終わり僅かながら大きくなった一夏のISにBTの攻撃が殺到する。

「えー。あれはもう無理なんじゃない？」

「そんなことはない。あれに似た装備が私のISに積まれているが、避けきれぬ奴はいた。」

「織斑君に出来るの？」

「さあ？判らない。セシリア次第だ」
「そっかぁー」

正直かなり難しいと思う。

くどい様だが代表候補生が相手、頭に血が登っていたとしてもあの狙撃の腕だ。BTも稼働率100%では無いにしろかなり使えるのだろう。

事実、セシリアのBTによる攻撃は殆ど当たっている。

……ただ一つ疑問が浮かぶ。何故スターライトmk？で攻撃をしない？

セシリアのBTに一夏は翻弄されていた。

さつきまでの狙撃ならまだ予測して回避はできたが今は違う。死角からの攻撃で全く攻撃への機会を見出だせない。

「くっ！」

「今度こそファイナーレの時間ですよすわね！」

（畜生！あんな仁王立ちで好き放題言われるとはな。どうやってあれを回避する！？幸いライフルの攻撃はないんだ。何か方法があるはず！……？）

一夏もセシリアの不可解な行動に疑問を覚える。

（……………仁王立ち？ライフルの攻撃がない？何故だ？自惚れかもしれないが、今のセシリアは全力で俺を潰しに来ている。攻撃の手を緩める理由はない！まさか……………）

曖昧な願望などではなく確信を持って言える。

（仁王立ちじゃなくて動けない！ライフルも撃たないんじゃないじゃなくって撃てない！）

おそらくあの板のようなものを動かすためにはかなりの集中が必要なのだろう。希望が見えてくる。

……だがそれでもまだ足りない。

（確かにこれで攻撃の目処はたった。でもまだ駄目だ今なら突撃して斬りつける事は出来るが、何度も攻撃できる程エネルギーは残ってない。3回、いや今から受けるダメージを考えると2回が限界だ。）

「ブレード一本ではな……」

先の変化の際どこか見覚えのある形に変わっていたが所詮はただのブレードこればかりはどうしようもない。何か他に方法は…

ピッ！

先の言葉に反応したのか白式のウィンドウが再表示される。

そこには……

近接特化ブレード雪片式型

単一使用能力《ワンオフアビリティ》零落白夜（バリア無効化攻撃）

（……………雪片式型？ 雪片！？）

それは千冬がかつて乗っていたIS「暮桜」の持っていたブレードと同じ名前だった。

式型ということで少々形は変わってしまったてはいるが確かにその名残はあった。

そしてなによりも、

（バリア無効化攻撃！？）

これこそが千冬をモンドグロツソ大会優勝へと導いたワンオフアビリティであった。

どういうわけか今その力は一夏の白式にも継承されている。

バリア無効化ということとは絶対防御を強制発動させる。つまり通常では考えられないエネルギーを削る。

(これで全て揃った！あとはタイミングだ！)

これまで以上に集中し、ブルーティアーズの攻撃を回避する。ギリギリまでエネルギーを残しておかねば途中で打ち落とされる。

「くっ、いきなりなんですの！？その機動は！」

セシリアが戸惑う。

セシリアはもうすでに本気だ。事実、織斑一夏はもうエネルギー切れで落ちる。そのはずなのにここに来ての機動はなんだ？

余計な雑念が入ったためBTの操作が一瞬だけ乱れる。

だが、それで十分だった。

(来た！！！)

白式を駆りセシリアの元まで流星のように突撃させる。

「なっ！」

突然の突貫に驚愕するセシリア。だがもう遅い。

「単一使用能力《ワンオフアビリティ》零落白夜発動！！！」

ブルーティアーズ目掛けて全力で振りぬく。

無駄な軌道を描かず真っ直ぐにブルーティアーズを切り裂く。剣道をした甲斐があったというものだ。

「きゃあああ」

一撃とはいかずともかなりの大ダメージのようだセシリアはもう動けない。

「止めだあああああ」

雪片の返す刀でもう一度ブルーティアーズを斬る。

「勝っ」

ブー

「ブルーティアーズ、白式残存エネルギーゼロ。引き分け」
気の抜けたブザーと山田先生の声アリーナを震わす。「馬鹿者
が…」と千冬姉の声が聞こえた気がした……。

「え、何？ なんで？」

一夏VSセシリア（後書き）

いかがだったでしょうか？

考えがセコイ？マリーダとどちらが対戦するか決まらなかったから
って都合よく終わらしたわけじゃありませんよ？汗
すいません。まじでどっちがいいか判りませんでした。

次回はまた時間が掛かりそうなのでどっちがマリーダと対戦したら
いいか感想を送ってほしいです。なかつたら適当に決めますが。

そしてお知らせです。

時間がかかる理由のひとつとして私、明日から東北の復興ボランティア
に行きます。

ケータイ投稿もあります但し改行とかがわかりにくいので帰ってきて
から執筆するつもりです。

27日には帰って来ますが流石にしんどいので早くても28日晩に
なります。もっと遅くなるかも？

そういうわけなんでよろしくお願ひします。

感想くださいね！。

出撃！（前書き）

この連載小説は未完結のまま約2ヶ月以上の間、更新されていません。……こんな文字見たくはなかったんですよ。すよホントに。

結局最終投稿日から3ヶ月弱。

ホントにすみません。

読んでくれる方には申し訳ないことをしました。

投稿してないにも関わらず感想を下さった方もいて嬉しかったです。

でもこの後の続きはまだ書いてないんです。キリッ＼（＾o＾）／

あ、すみません。石は勘弁して下さい。orz

9月22日下から2行目を誤字修正しました。

出撃！

「馬鹿者。特性を考えずに零落白夜を使うからだ」

何故引き分けになったのか判らないままピットに帰って来た一夏の疑問に答えたのは当然、千冬だった。

「バリア無効化攻撃なんてずっと使用できる訳が無いだろう。あれは自分のエネルギーを削って発動している」

正に諸刃の剣なのだ。

使い時を間違えればあつ、という間にエネルギーが切れて自滅する。

「だが、まあ今回は仕方ないな。開始から中盤までに食らったダメージがエネルギー切れの原因だ。零落白夜の使いどころという意味では間違いはないだろう」

一応、評価は得られたが一夏はあまり喜べなかった。引き分けでは意味がない。

自分がやられた後に他の敵が来たらどうするのだ。

終始浮かない顔の一夏だったが

「まあ初戦にしてはよくやった一夏」

「そ、そうだぞ一夏。代表候補生相手に引き分けたのだ。よくやった方だ」

千冬と幕の二人の辛い言葉で少し楽になった一夏であった。

「負けた……。」

代表候補生であるこの私が素人相手に……。

試合結果としては引き分けだがそんなことはセシリアには関係無い。

今までの自分はなんだったのか？

素人相手に負ける代表候補生に価値など無い。
他国の代表候補生もいるというのにこの体たらく……国の恥だ。
これが本国に伝われば代表候補生から降ろされるかも知れない。
自分の代わりなど幾らでもいるのだ。

あれだけ大見得を切った今、クラスの人たちは自分のことを晒っ
ているだろう。

あのスペイン代表にもなんて言われるか……。

それにしてもさっきから何やらモヤモヤしますわ？悔しさとは
違う喜びのような……一体なんだと言っていますの？

「オルコット。オルコット！いないのか！？」

織斑先生？

「引き分けちゃったねー」

「ああ、引き分けだな」

リナを含めアリーナの観客席にいる生徒全員がざわめいている。

一夏のあのブレード、バリア無効化攻撃がついているとはな……。
おかしな偶然だ。普通兄弟だからって機体のワンオフアビリティ
イが同じなんてあるのか？

「そういえば、引き分けの場合どっちと試合するの？」

「さあ？わからない。織斑先生から連絡が入るはずだが……」

ピピピッ！

「クルス」

早速連絡が来た。

「はい。織斑先生。私の試合はどうなりますか？」

「勝った方と勝負という話だが引き分けでも構わんだらう？」

「ええ、勿論」

引き分けだから勝負しないなんて事が有る訳が無い。

「ならば今回はオルコットと試合しろ。一夏は今回引き分けまで持ち込んだとは言え初心者だ。連戦は不可能だと判断した」
「了解しました。一夏とはまた別の機会にするとします」
「そうしてくれ。試合は30分後だ。そろそろピットに入って準備しておけ」
「了解」

「結局、セシリアさんと試合になったねー」
「そうだな。まあどちらにせよ一夏に戦闘続行は無理だ」
白式がダメージを受けすぎなのだ。序盤から最後までIS全体に攻撃を受けつづけていた。短時間での補修では万全の状態とは言えないだろう。

対してブルーティアーズは最後に喰らったがそれだけだ。30分もあれば試合に出るくらいは問題ない。

「さて、試合の準備もあるしピットに行ってくる」
「りょーかい。頑張ってるねー」
「ああ」

ピットに着くと一夏と篠ノ之、織斑先生に山田先生もいた。

「お疲れ一夏」

「ん、ああサンキュ。マリーダ」

宣言通り勝つ事はできなかったがあまり気にしている様子はない。大方、篠ノ之と織斑先生がフォローでも入れたのだろう。

「しかしなかなか熱い試合をしたじゃないか？意外にもこの1週間の剣道の練習が活きたな」

「ああ。そうだな……ってなんだよ！？見てたのか！？」

「そうだが？何か問題があるか？」

「いや…別に無いけど……」

何故かまた篠ノ之が睨んでくる……何故だ？

「おい、クルス…早く準備をしろ」

織斑先生に怒られてしまった。

まあ確かにあと10分つもしない内に試合だ、急ぐとしよう。

「一夏、話はまた後でな」

「わかった」

では機体の最終チェックを行うとしよう。

「…来い」

その一言で手首にあったブレスレットから光が溢れる。

量子変換されていたマリィダの機体が体を覆っていく。

ファーストシフト

深緑の脚部が現れる。一次移行後の白式よりも更に一回り大きく、複数のスラスタが付いている。

同じく胴体部分もかなり大きい。胸部には二つの砲門があり、物々しい。

しかし最も妖しく周囲を圧迫するのは最後に現れた四枚の羽、バインダー部分だ。それだけで機体全てを覆ってしまう羽は従来のISからは有り得ない大きさだ。

最後にマリィダの頭部に一つ目のヘッドギアが現れ、展開が終了した。

「…は………?」「」

「……入試の時にも思ったが、大きすぎるだろう?」

絶句している一夏と幕の反応を見て千冬が呆れにも似た言葉を返す。

一夏の白式でも登場者の1.5倍くらいのサイズだと言うのにマリィダのISは更にその1.5倍近くのサイズになる。装甲も厚い為、IS全般に言えたはずのスマートさは全く鳴りを潜め戦車のような鈍重さを感じさせている。

「なあマリィダ、お前の戦闘の腕を知ってる訳じゃないけど……これで戦えるのか?」

「そ、そうだ！まともにかんのではないか！？」

一夏と幕は当然とも言える質問をする。

それに対してマリィダは

「まあ見ていてくれ」

それだけだった。

「織斑、篠ノ之そこを退け。そろそろ時間だ。説明なら試合の後にしてもらえ」

千冬の指示に従い一夏と幕はピットの側面に移動する。

ここからはもう戦闘以外の事は何も関係がない一個の戦闘単位として自身と敵を計算し、倒すのみ。

マリィダは翔ぶ。重力の井戸の底で再び得た己の機体を駆って。

「マリィダ・クルス。クシャトリヤ、出る！」

出撃！（後書き）

結局VSセシリアとなりました。

結果発表の遅いアンケートに答えてくれてありがとうございます。前書きにも書いたとおりこの後の話はまだ書いていません。

理由としましては久々の執筆ということで文章のおかしいところが多々あると思います。（というかあります）

申し訳ありませんが今回の話の感想を見て徐々にマシにしていくので文を読んで違和感を覚えたら、お手数ですが感想ください。

他人に意見を求めるな軟弱者と思われる方は結構です。（笑）
ではまたそのうち。

強者（前書き）

こんばんは。

まずは機体解説は削除したことをお知らせします。

理由としては感想を見てくださるとわかります。

改訂版の機体解説を連続投稿します。

たくさん感想ありがとうございました。

かなり変更してます。

あと、少し前になりますが、通りすがりの髭達磨さんが姉妹サイト『みてみん』にIS版クシャトリアを装着したマリーダのイラストを投稿してくれました。

マリーダで検索したら出ますので見て行ってください。

そして本文。

…先に言っておきますが、作者はオルコツ党ではありません。

では、どうぞ

強者

IS学園アリーナ。セシリアは今回も相手が出てくる前にピットから先に発進し待機していた。

アリーナ全体の空気は先程の試合の熱気を保ったままでいる。

先程の引き分けという名の敗北でセシリアが感じた不思議な感覚を持って余しながらも、次の試合へと気持ちを切り換えていた。

「次は油断しません。今度の相手は、私と同じ代表候補生ですよ。自分に言い聞かせ、集中し始めたセシリアだったが、

「な、なんですのあれ!？」

深緑の巨人を目の当たりにし、驚愕に包まれた。

「すまない。待たせたな、セシリア」

ヘッドギアで目から上が隠れてしまっているマリータは、困惑しているセシリアに謝罪すると同時に苦笑する。

(それほど驚く物なのか?)

普通は驚くのだが搭乗者のマリータにとってはこれ以外の機体は考えられないので、この違和感を理解出来ない。

「え、ええ。……ではなく!!なんですのそれ!?本当ISですの?」

「ああ、スペイン試作第三世代ISNZ-666クシャトリヤだ。代表候補生の私専用態々開発されたものだ。問題なく運用はできる。それ以外は教えられんが」

「当たり前ですわ!敵の施しなど必要ありません。馬鹿にしないで下さいます!?仮にも武人の名を冠した機体に乗っているのですよ?早く掛かってきなさいな?叩き落として差し上げますわ!!」

先の試合で、セシリアの武装をあらかた見てしまったマリィダの遠回しの謝罪のような物だったのだが、相変わらずの判りにくさとセシリアが感じた恐怖にも似た感情が相まって怒らせてしまった。

だが時間から考えても試合を始める事には同感なので、

「そうだな。織斑先生、試合開始の合図をお願いします」

山田先生でもいいのだが、この張り詰めて空気で山田先生がテンパられても困るので、通信を開き千冬に連絡をする。

「わかった。それでは両者位置に着け」

双方共に位置に着き戦闘体制へと入る。

そしてブザーと共に千冬の声が、アリーナに響き渡った。

始 試合開

その声の残響が終わらぬうちに、セシリアの前からマリィダの姿が消える。

(な……!)

その速さに驚愕するセシリアだが、即座にハイパーセンサーの警報が鳴る。

回避か迎撃の選択を迫られるが、既に向こうの射撃体勢は完了していると判断し、回避を選択する。

開始直後に姿を見失ってしまっているのだから、当然の判断である。

しかし、その判断でも遅すぎた。……近接戦闘では。

セシリアが、ハイパーセンサー報告だけで状況を理解し、敵の位置を正確に把握することを忘れる、という初歩的で致命的なミスに気付いた時には既に、深緑の巨人は緑に光る刃を持ってこちらを斬りつけていた。

(やられる……!?)

咄嗟の反応で自身の愛銃スターライトMk?を前に出す。奇跡としか言えないが、寸での所でマリィダの斬撃を押しとどめる。

さながら、刀同士の鏖迫り合いのようだが、セシリアの危機的状況に変わりはない。本来の用途とは正反対の使われ方をした、スターライトMk?が悲鳴を上げている。幸い、相手の格闘装備には焼切る程の出力はないらしい。力任せに相手を押しやり脱出する。

相手を見失わないよう視界に留めながら急速にマリィダとの距離を取った。

一方、マリィダはというと次の攻撃へと入っていた。

試合開始直後の瞬間加速による奇襲は、巧くいった。ただの瞬間加速ではあれほどの速度は本来で出ないのだが、シールドエネルギーを削ればあれぐらいはできる。当然、消費量としては馬鹿に出来ないのです、多用はできないが。

しかし、結果的にダメージを与えることは出来なかったが、相手にプレッシャーを掛け、行動を制限した。しばらくは回避重視で、スターライトMk?による射撃しかできないはずだ。

(射撃戦はこちらも胸部の砲撃のみだな。)

セシリアとマリィダが理由は違えど、求めた射撃戦へと入る。構造上ライフル型のスターライトMk?を持つセシリアの方が命中精

度は高い。

が、だからと言ってそうそう当たる物ではない。しかも、気を抜けば接近され近接戦闘へ持ち込まれるという認識が集中させる時間を、許さない。

(くっ、これでは埒が明きませんわ)

試合としても単調になり始め、セシリアの苛立ちが募る。

戦局を変えるためにも、自身のISに搭載された本当の主武装を使うことにした。

当然、いままで敵を侮っていた訳ではなかった。しかし、前の試合で弱点を看破されていると考えたセシリアは、使用を控え出来る限りライフルでの攻撃を優先しようとしていた。

だが、思いのほか機動性に優れる、クシャトリアを前にセシリアはブルーティアーズを戦場に投入した。

(ついに出てきたか……。)

マリィダはブルーティアーズの展開を確認する。レーザービット4基がセシリアの周囲に広がる。

先の試合とは違って自身の近くに置くことによって、ブルーティアーズの行動を減らして隙を無くし、固定砲台として使うことにしたようだ。素人にも落とされてしまったので早急にスタイルを変更したのだろう。射撃型のISとしては別段可笑しいことではない。

今までのヒット&アウェイよりは、格段に命中率が上昇するだろう。だからといって、当たってやる訳にはいかない。マリィダ自身もセシリアと同系統の武装を展開する為にイメージを広げていく。四枚羽根を広げ、自身の端末を掛け声と共に空中へと解き放った。

「ファンネル！」

元ネオ・ジオン軍残党「袖付き」のエース、マリーダ・クルス中尉のクシャトリヤは、地球連邦軍独立機動艦隊ロンド・ベル隊の数々の、MS乗りを落としたり。彼女の強化されたNT能力によって操られた特殊武装ファンネルは、ミノフスキー粒子散布下の劣悪な戦闘領域で相手の死角から撃つだけでなく、圧倒的展開速度によって成す術も無く敵を殲滅した。

ISとは言え、その機体性能を可能な限り踏襲した場合、どうなるのか？

本当の戦闘が始まる。

「ファンネル！」

そう聞こえた時には、もうすでに始まっていた。いや、終わりが始まっていたのかも知れない。

突然、敵のISの羽根が開いたかと思うと小さな円錐形の筒が8基、此方に向かって来ていた。

ミサイルかと思い、回避行動に移るが違った。

各々が意思を持っているかのように動き、此方を包囲していた。

(こ、これは！？まさか私と同じビット！？)

有り得ない展開速度だ。絶対に自分には出来ない。

これだけのビットもどきに囲まれて全てを回避するのは不可能だ。それでもこのまま何もしなければなぶり殺しにされる。そう判断したセシリアは、自分のビットを諦め全力で避ける。

考えが終わった直後に敵のビットもどきはビームの嵐を産み、瞬間にセシリアのビットは破壊された。セシリア自身も無視出来ない

量のダメージを喰い、機体の損壊も出来ている。

圧倒的技量に戦慄するセシリアだが、マリィダの方を見て更なる驚愕と恐怖に包まれる。

動いているのだ。クシャトリヤが。

（有り得ない！有り得ないですわ！）

あれだけのビットを驚異的な速度で正確に展開してなお、此方に向かつて来ているのだ。

到底及ぶ物ではない。

驚きを通り越し、恐怖を塗り替え、尊敬すら感じ、始めたセシリアは次第に今までの自分が馬鹿らしく、なっていた。

（何をしていたんでしよう、私？代表候補生ぐらいで世界で一番強いかのように振る舞い、あまつさえ、男が全て父様のように情けない男ばかりだと奴隷のように扱うなんて。）

先の試合を思い出し、反省する。織斑一夏はIS初心者にもかかわらず、自分と引き分けにしてみせたではないか。

マリィダとの試合の前から感じていたのは、自分の知らない男を知った驚愕と喜びだったのだろう。

マリィダがもう直前まで来ている。

（それにこんなにも強い人が、世界にはいるじゃありませんの。まだまだ人としてもIS操縦者としても未熟者ですわ）

完敗だ、そう感じて回避を止める。よくもまあここまで回避したものだ。シールドエネルギーは二桁にまで、落ちていた。

結局、マリィダが此方に来るまで、持ちこたえてしまった。時間にしてみれば数秒なのに、とても長く感じた。

しかし、それももう終わりだ。ここでもまた、負けてしまった。

本国は本格的に交代要員を探すかもしれない…。
そう考え目を閉じかけようとした時、

「頑張れ！セシリア！あきらめたら、そこで終わりだぜ！」

……そう一夏の声が聞こえた。

（ああ、もう。この人は……。さっきまで、戦っていたというのに、私を応援しますの！？マリーダさんではなく？）

まったく理解できない。…まったく理解はできなかったが、セシリアが感じたのは呆れでも、嘲笑でもなく、喜びだった。

（ふふふ…そうですね。織斑一夏も諦めなかったからこそ、あそこまでやってのけたのですわ。今度は私の番ですはね！）

勝つ事への執着が再びセシリアを動かす。

ここまで、使ってこなかった残り2基のブルーティアーズを眼前まで来た、マリーダへ向け言い放った。

「おあいにくですが、ブルーティアーズあと2基残っていましたよ！？」

腰部の砲塔からミサイルが射出される。

回避できるはずもなくクシャトリヤに直撃した。

……さらにセシリアは追撃に入る。

「クツ…インターセプター！」

即座に近接武装を展開できず、プライドをかなぐり捨て初心者用のキーワードを唱える。

コンバットナイフが展開され、セシリアは爆炎に包まれているはずのクシャトリヤ後方へと回った。

闇討ちと言われても仕方がないような追撃だが、勝つ事意外を考えていない今のセシリアには関係が無い。

がら空きになった、背中へとナイフを突き出す。

(獲った……)

「見事だセシリア。あそこからこんな攻撃がくるとは思わなかったぞ」

…マリィダが喋っている。心底、感心したかのように、こちらへと話掛けてくる。

自分は勝ったのか？その割に試合終了の合図がでないのは出ないのは、いったいどういう事だ？

そして気づく。突き刺したはずのナイフがなにかに止められていることに。

「いい試合だったよ」

機体をこちらに向け、本当に楽しそうに言う。

「は？」

事態に付いていけず、棒立ちになったセシリアを、

4つのサーベルが切り裂いた。

.....試合終了 勝者マリィダ・クルス.....

強者（後書き）

また、やっちまった。

マリィダ視点が少ねえ。

でもって、マリィダが悪者みたいに終わったたちまった気がする。○

r z

感想お待ちしてます。

機体解説（前書き）

連続投稿となります。

また、感想を読んで下さるとわかるのですが、機体性能が変わって
ます。

やれることは変わらないのですが、とりあえず見てください。

機体解説

ISNZ - 666クシャトリヤ

所属：スペイン

設計：マリーダ・クルス+????

建造：スペイン+????

全長：3.8M

材質：全体 電磁装甲

武装：胸部高圧縮荷電粒子砲×2（出力リミッター70%）

腕部プラズマソード×2（出力リミッター30%）

後部バインダープラズマソード×2（出力リミッター30%）

ファンネル（ドラグーン）（通常使用モードでは8基まで・

出力リミッター40%）

装備（武装以外）：前部バインダー搭載エフィールドジェネレーター

メインバーニア×4（腰部×2・バインダー×

2）

サブバーニア×8（脚部×4・バインダー×4）

搭乗者：マリーダ・クルス

単一使用能力：現時点での発現無し

解説

機体：スペイン代表候補性としての実力を示した、マリイダが前世の愛機をモチーフにコンセプトだけを国に依頼したものである。

大半の装備はスペインの技術で作成されているが、ファンネルは外部から持ち込まれており、現状でも出所は不明のままである。

ファンネルを搭載したことにより拡張領域が通常の兵器を受け付けなくなっており、現段階ではパッケージ等の換装や追加武装増設などもできなくなっている。

高圧縮荷電粒子砲：高エネルギーにより励起された荷電粒子やプラズマ等を臨界まで圧縮し光速で射出する指向性エネルギー投射兵器
ビーム発振器内には半永久的に撃ち続けられる程の弾薬が貯蔵されているようで、弾切れは問題無い。

現状では、唯一の通常射撃兵器であるため、粒子圧縮率が高い数値で固定されている。

プラズマソード：本来なら荷電粒子砲と同じ方式により、ビームソードを搭載する予定だったが、刃として収束することが出来なかったため、プラズマ方式へと変更した。

その為、従来の武装と比べては強力だが、ISの近接武装としては弱い部類となっている。

ファンネル：正式名称ドラグーン・システム（Disconnected Rapid Armament Group Overlook Operation Network System：分離式統合制御高速機動兵装群ネットワーク・システム）

多数の攻撃端末（飛行砲台）を同時に制御しオールレンジ攻撃を行う広領域戦闘性に優れた兵装である。

イギリスのブルーティアーズ（BT）同様、遠隔操作兵器ファンネルが搭載されているが、BT兵器とはコンセプトが異なる。

各攻撃端末はドラグーンと呼ばれ、個々にビーム砲と多数の推進・姿勢制御用スラスタを備え、高い攻撃力と機動力を持つ（ドラグーンの稼動に必要なパワーは、母機に戻ることで補給される）。多数のドラグーンに加えIS本体が個別に移動・攻撃する事で変幻自在のオールレンジ射撃を織成す。

ドラグーン・システムの操作制御には操縦桿等による手動操作は一切必要とされず、神経接続によって、パイロットの思考と各攻撃端末からのフィードバック情報を脳 攻撃端末間で相互伝達する事によって行われる為、発揮される高機動性と比して各攻撃端末を複雑に指揮することが可能である。

母機 攻撃端末間の通信方式は、大量の情報を遣り取り可能な量子通信である為、無線での誘導を可能とし、個々の端末の動きに制約が少ない。

同時マルチロックオン能力と、変幻自在のオールレンジ攻撃能力を獲得しているが、マルチロックオンシステムの制御とドラグーンの誘導には、人並み外れた直感力と洞察力を身につけ、空間認識能力を持ち膨大な量の情報処理をパイロットに要求するため、マリーダでなければ性能を最大限に発揮させることは不可能である。

これらの情報需要に対応するため、機体頭部の複合センサーが取り付けられ、情報処理能力を強化されている。

提供された、技術では何故か大気圏下での運用は不可能とされていたので、大型化し大気圏内飛行を可能とする高推力スラスタをとりつけている。

なお、この技術ではミサイル等の質量兵器の操作も可能だが、バイナードに入らなくなるため、ビーム兵装のみとなっている。

ファンネルの名の由来は大気圏下用のドラグーンが漏斗型をしていたため。

電磁装甲：通電方式で大電流を蓄えたキャパシタからの大電流によ

つて、敵弾を流体化・気化させようというものである。

主装甲の外部に2枚の金属板を間をあけて取り付け、これらの中にキャパシタからの数千ボルトの電圧をかけておく。

センサを必要とせず、導電性の敵弾が貫通した瞬間に2枚の金属板の間をショートさせることで回路が閉じられ、数千アンペアの大電流によって敵の弾芯や貫徹体をジュール熱によって溶かし、気化させる、又は突然流れる大電流によって生まれる電磁場によって横方向の力を与え弾芯や貫徹体を分断するというものである。

しかし、大量の電力を使用するため、後述のファイールド同様、多用はできない。

ファイールドジェネレーター：搭乗者の判断により前部バインダーのジェネレーターからの電力量（I）を自在に変更、展開するシステム。

レーザーの偏光を目的とされたが、出力不足によりビーム、レーザー系の攻撃を軽減することしかできない。（おおよそ25%カット）シールドバリアとは別の物。

しかも、物理的ダメージなどには効果がない。また過剰な使用はジェネレーターのオーバーヒートを起こし、システム全体の能力低下を引き起こす。

メイン・サブバリア：ISの基本システムPICによりISは浮遊・加減速などを行うことができる。

しかし、クシャトリヤは通常より1.5倍近く大きなサイズで攻撃を受ける面積が大きいので、さらなる高機動が要求される、よってPICとは別に加減速装置を搭載している。

役割として浮遊と姿勢制御にPIC、加減速にバリアとなつている。

非常に強力なバリアの為、最高速度を出し続けると、シールドエネルギーが減少を引き起こす。

バインダー：前述にもあるがファンネル、エフィールドジェネレーター、各種バーニア等、様々な装備を格納している。その他にバインダー先端部に“隠し腕”がある。

4枚のバインダーすべてについており、後部にはプラズマソードも装備されている。

通常のISにはありえない第3の腕だが動かし方はファンネルと同じで量子通信による、制御である。

通常使用モード：ファンネルは強力な兵器であるが、現在試験運用中なのでシステムとして確立されているわけではない。

過剰な使用は操縦者にシステムが発信する莫大な情報量が脳の記憶因子にマイナスに作用したり、激しい頭痛を引き起こす事があった為、国から制限を受けている。

解除にはマリーダの申請とスペイン軍上層部の許可が必要で、IS学園在籍中は担任である、織斑千冬の承認の3重ロックがかかっている。

出力リミッター：実際の軍事行動下にしか解除はされない。

通常使用モードと同じで、マリーダの申請と軍上層部の許可に加え政府の許可も必要とされている。

機体解説（後書き）

いかがでしたか？
コンセプトは

ミノフスキー粒子なんてISの世界になかった

です。

SEEDの技術なら作者の感覚ではギリギリセーフなのでシステム
だけ使わせていただきました。

<000> さん。相談に乗ってくれてありがとうございます。

芽生えた恋心と発覚したロマン（前書き）

こんばんは。

今回は試合直後の話だけなので短いです。

では

芽生えた恋心と発覚したロマン

勝者 マリーダ・クルス

「「あ………?」「」

一夏と篤は、試合の最初から最後までずっと呆けていた。

先の試合とのレベルの差が有り過ぎた。千冬は特に動じている様子は無いが、山田先生は一夏達同様、開いた口が塞がっていないかった。

「えっと………何今の?」

「さ、さあ……? 私にもわからん」

驚きの理由としては、試合全てに言えるのだが、一夏達は試合最後に起きた奇怪な現象についての理解が追いついていなかった。

「ち、千冬姉! あれはなん……だあ!!!!」

「織斑先生だ。何度言わせる?」

疑問をすぐに千冬に疑問を直ぐに解消したい一夏だが、案の定出席簿による制裁を喰らう。

「試合後に聞けと言ったはずだ。帰ってくるまで黙っている」

「わ、わかりました」

退散する一夏だが、ピットに通信が入る。

試合終了。織斑先生、帰還の許可を

「了解した。すぐに帰ってこい。クルス」

通信によるマリーダの申請に千冬が答える。

程無くクシャトリヤは、一夏達の待つピットへと帰ってきた。

試合終了直後のマリータと言えば、ピットに帰る途中ですでの先
の試合の反省を行っていた。

（やはり、ファンネルの多用はできないか…。サイコミュと違うシステムで動いていることが、原因だろうか？それとも私のNTとしての力が低下しているのが問題だろうか？）

転生してから今日に至るまで自身の強化人間として生み出されたNT能力がどうなっているか調べてきたマリータだが、現前として不明瞭なままである。

（しかし、あれだけ接近したとは言え、最後にセシリアの攻撃を許すとは…。一見、戦意を喪失していたかの見えたのだが、そうでもなかったのか？）

何者かによる技術提供でファンネルとよく似た運用方法のドラグーンを動かせる事までは、分かった。

しかし、人の心が判るかと言えば、そうではない。

なんとなくは判るのだが、確信を持って理解をすることはできない。せいぜい勘がいい程度止まりである。

肉体も強化されているわけでもないの、あの頃とは違い異常な運動神経を持つているわけでもない。

それでも積み重ねられた経験で、生身でも十二分に強いのだが…。

（とりあえずは、勝った。さて、セシリアが今後どうなるかだが…）
ようやくピットに着く。

こちらに来た、一夏達を前にマリータはISを解除した。

「マリータ・クルス帰還しました」

「うむ、ご苦労だった。クルス。流石だな？」

「いえ、最後に油断しました。まだまだですね」

「あれでまだまだとか…。俺はどうしたらいいんだ？」

一夏がなにやら言っているが、あまり気にする事では無いだろう。

初心者なら、あれぐらいで丁度いいだろう。

「と、ところであの最後にセシリアの攻撃は、どうやって止めたのだ？」

「そつだ！あれはなんだよ？」

幕の言葉に乗って、一夏も聞いてくる。

「……一応、機密なのだが、既に使用しているから、まあいいか？
いや、特に大した装備ではない。腕で止めただけだ。クシャトリヤのバインダー部分には、自分の腕以外に4つの隠し腕が付いている」

「隠し腕！？なんだそれ！？どうやって動かすんだ！？」

「お、おい一夏……？」

「いや、説明すると長くなるから……」

急に一夏の目つきが変わり、次々に質問をしてくる。

「長くてもいいから、教えてくれ！！」

……何やら少年のロマンに火を付けてしまった様だった。

一夏の気迫に押され、かなり話し込んでしまった。

今日の予定も全て終わり、リナの待つ自室へと足を運ぶマリィダだったが、

「ちよつと、よろしくて？」

どこか既視感を覚えるセリフを掛けられた。

「セシリアか。どうした？」

現時点で声を掛けられる、理由を考えるとあまり気分の良さそうな物ではなさそうだが、何だろうか？

「あ、あのですね……」

「なんだ？」

「もつ……わけ……た……すわ」

声が聞き取れない。なんだと言うのだ。

「すまないが、もう一度言ってく……」

「だから！申し訳なかったですわ！と言っているのです」

何故だか逆ギレ気味だが、セシリアが謝って来た。

「何のことだ？何に、謝っているのだ？」

私に謝ることなどないはずだ。

「貴方が好意を持っている、一夏さんを不当に貶めた事を謝っているのです！」

「は？」

それを言うのは私にではなく、一夏に言うべきなのではないか？

「も、勿論お、一夏さんにも、この後、謝罪に行きますわ。でもま

あ、初めから一夏さんの味方でいた、貴方にも一度謝っておかないと対等とは言えませんか」

そ、そうか。わかったような、わからないような？

一夏さんと呼ぶ様子から見て、ある程度一夏に好意を抱いたかのように見えたのだが、対等と言う言葉から鑑みるにISの話のようだ。

「わかった。これからもよろしく頼む、セシリア」

「ええ、負けませんわ！」

何故だか、悔しそうなセシリアの顔が気になったが、まあいいか。

新たな誤解を生み出した事には気付かず部屋へと、帰るマリィダだった。

「いいなあ。隠し腕！俺も欲しいぜ」

「な、なにを言うか！そんなもの邪道だ！」

「一夏さん！？私の話を聞いていますの！？」

全く関係の無いところで、一夏のマリィダに対する、好感度が上

がり、全く関係の無いところで、
恋する乙女のマリーダに対する、
危機感が上がった。

芽生えた恋心と発覚したロマン（後書き）

いかがですかね？

別に一夏のロマンが今後の話に影響を及ぼすことはないです。

ただ、新たな誤解が生まれただけWWW

今更な話ですが、マリーダを誰かとくっつけていいのだろうか???

代表決定！（前書き）

こんばんは。

感想ありがとうございます。

まだ、セシリア戦の戦後処理です。

またもや短いですが勘弁してください。
でわ、

代表決定！

「と、言うわけでクラス代表は織斑一夏君に決まりました！」

「いえ〜い」

「やったね！」

山田先生の言葉にクラスの人間が、歓声を上げている。

、
が

「ち、ちよつと待った！なんで、俺になっっているんですか？」

一夏が喚いている、まあ確かに引き分けなので絶対に一夏でないといけない訳ではないが。

「そ・れ・は！この私が辞退したからですわ！」

……セシリア。好きな相手の前とはいえここまで前言を翻すか。

恋する乙女の行動力は恐ろしい。（苦笑）

「昨日も言いましたが、私もただ男と言うだけで、一夏さんに辛く当たった事、深くお詫び申し上げますわ。しかしながら引き分けに持ち込んだとはいえ、一夏さんはまだ初心者。これから更なる経験を積んで頂く為にも、クラス代表の座はお譲り致しますわ！」

これには全面的に同意する。ただ一夏限定かもしれないが、セシリアの男嫌いが、ここまでマシになるとは思わなかった。

「さ〜つすが、セシリア！」

「わかつてる〜」

「だよね！折角、クラスに男子がいるんだから、それを使わない手はないよね〜」

……他の女子には、まだまだマスコット扱いだが、今後に期待するとしよう。

「え、いや、あゝ、……。そ、そうだ！マリーダ！マリーダは良いのか？勝ったんだからマリーダで良いじゃないか！？」

まったく、そんなに嫌なのか？

「一夏。私はただ試合をしたただけだ。クラス代表の座を賭けた、勝負とは別の物だ。諦めて、やってみればいいさ。私も放課後の練習ぐらいなら付き合っから……。な？」

これでどうだ？

「あゝ。わかった。わかったよ。マリーダがそこまで言うならやるよ。でも、練習はちゃんと付き合ってくれよ？」

「了解だ」

やれやれ、ようやくやる気になったか。世話が焼ける。

「な、何これ？」

「この二人、本当に知り合って間もないの？」

「通じあい過ぎじゃないかしら？」

「や、やっぱりそう言う関係？」

クラスがまたざわめいている。……。おかしな事を言っただろうか？

「「ちょっと！ちょっと、待て（お待ち下さいな）？私もその練習にわたくし参加するぞ（致しますわ）！」

篠ノ之にセシリア？……。ああ、そう言う事か。

放課後に一夏と会えなくては意味がないからな。……。待て、何故睨む？

「（私が最初に教えてくれと言われたんだぞ……。）」「
」（私が先に練習にお誘いするつもりでしたのに……。）」「

なにやら、言っているようだが、まあ放って置けばいいだろう。
別に参加してもらって不都合はない。

だが、この鈍感な

「いや、いいよ。二人とも、忙しいだろ？それに幕、お前はISが
無いだろう？」

……それはないだろう。

だが、まあ篠ノ之にISが無いのも、また事実。どうする？

「け、剣道。そう剣道だ。まだまだお前は弛んでいる。鍛え直して
やる！」

篠ノ之はなんとかなったか。

セシリアは、

「わ、私は」

パンツ！！

「痛い……なんで俺？」

「いい加減にしろ。話が進まないだろうが」

クラスを置いてけぼりな状況に千冬の制裁が入る。

「クルス。別にこの二人が入っても構わんだらう？」

「はい。問題はありません」

「なら、こいつらと一緒にやってやれ。篠ノ之、ISは打鉄なら貸
してやる。必要な時に職員室まで来るように。以上だ。いいな？」

「了解しました」

「わかった（わかりました）（わかりましたわ）」

「と、まあ要するに一夏と篠ノ之とセシリアと放課後に練習することになった訳だ」

放課後、部屋に帰った私は、今日の出来事をリナに話していた。さすがについ先日試合をしたばかりなので、練習は来週から始める事となった。

私は特に問題はなかったが、一夏の白式の修復と箒に打鉄を貸せるようにはそれぐらいの時間がかかることも一因となっている。

ならば、セシリアだけでも練習をしないと聞いてみたところ、
「私に恥を晒して死ねと？」

などと言われてしまった。……何か悪いことをしてしまったのだろうか？

「ふーん。でも、マリィダは代表にはなりたくなかったの？」

やはりリナにとっても代表と言うものは、気になるものかな？

「別に代表になることが、この学園の全てではないからな。私は私なりにやっけていくさ」

とりあえずは、一夏の成長を見守ることだろうか？

「そっかー。うちのクラスの代表はどう思ってるんだろうね？」

「さあ？まあ人それぞれでいいんじゃないか？2組の代表もこの間、練習に励んでいたぞ？」

学内対抗戦まで、あと少しだがまだ全てのクラス代表が練習をしているわけでは無い。

そういう意味では、リナのクラスの代表は真面目な部類に入るの

だろう。

「へー。でも、あんまり無理して体を壊しちゃいけないんだけどね」

「まあ、大丈夫だろう。誰かが無理矢理、代表の座を奪おうとでもしない限り、コンディションも問題ないはずだ」

「なにそれ？うちのクラスに、そんな無茶苦茶な事する人はいないよ？」

「例えばの話だ。特に深い意味はないさ。……お、そろそろ夕食の時間か。食堂に行こうか？」

「おっけー」

何故こんな話をしたのかは判らないが、後にこの事を思い出し呆れる事になるとはこの時の私は知らなかった。

代表決定！（後書き）

いかがだったでしょうか？

たまにはベタにフラグを立ててみたぜ！

つ、次こそチャイナ娘を出すんだからね！

リナ視点

チャイナ娘〓無茶苦茶な人

頑張れ酢豚エ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0549u/>

マリーダさんがISの世界に転生しました・・・。

2011年10月8日00時25分発行